

元初における日本人の燕京往還

植

松

正

目次

はしがき

一 第三次遣使への経過

二 第三次遣使と塔二郎・弥二郎の拉致

三 塔二郎・弥二郎の旅程（一）江都から燕京へ、世祖との対話

四 塔二郎・弥二郎の旅程（二）帰路、高麗王廷の政変

五 第四次遣使、塔二郎・弥二郎の帰還

むすび

はしがき

日本におけるモンゴル襲来についての研究史は古く、かつ数多くの成果を積みあげてきた。筆者は張東翼氏による第四次遣使に伴うモンゴル・高麗からの国書・書状の再発見に触発されて、いま一度日元外交史を学習しようとしたものであるが、なおみずから腑に落ちた感を得られない部分もいくつかあった。二人の対馬島人がかの国の使節によって連れ去られ皇帝フビライに接見されたという逸話はかねて抱いていた興趣尽きない主題の一つである。

本稿ではその対馬の人塔二郎・弥二郎が大モンゴル国（大蒙古国）・元朝の首都燕京を訪問して復た帰還した、ある限られた期間を当時の激動する政治状況の中で観察しようとする試みである。これに関する史料は決して多くはない。現存する諸史料の間の脈絡・関連性を整理することを通じて、日元外交における接触・交渉の跡を仮説の形であれ提示してみたい。

一 第三次遣使への経過

塔二郎・弥二郎は第三次と第四次のモンゴルの遣使に関わって結果として重要な役割を担った日本人である。まず第三次日本遣使は第一次と第二次の遣使の補完というべきものであった。池内宏氏の考究⁽³⁾などと重なるが、この間の経過について振り返っておきたい。すなわち第一次遣使では、至元三年（一二六六）十一月、正副国信使の黒的・殷弘が高麗の官人（宋君斐・金賛）を案内役として高麗王宮を出立したが、翌年（至元四年、元宗八年、一二六七）正月に朝鮮半島南端の巨濟島松辺浦に至り対馬島を遠望しながら風濤の逆捲くを見て引き返した。黒的・殷弘は復命のためにモ

ンゴルに一旦帰国するが、高麗の元宗は宋君斐・金贊を同行させて世祖に上奏し、モンゴルの使臣を危険にさらすことができなかった次第を縷々述べている。そのなかで対馬島の土俗は野蛮で礼儀がなく、かつ日本は高麗と通好しておらず、対馬島人がたまに貿易のために半島南端の金州に往来する程度であると弁明した。⁽⁴⁾

ところがこの報告を受けた世祖はきわめて不興であった。高麗系で寝返ってモンゴルに帰服した趙彝を通じて、朝鮮と日本との通交の歴史が浅くないことをかねて聞き及んでいたからである。同年六月十日、黒的・殷弘を高麗に遣して高麗国王に諭した内容は「卿、前後食言多し」などと厳しい言葉をつらね、そのうえで「今、日本の事は一ら以て卿に委ねん」と通好実現に責任を負わせている。⁽⁶⁾

これをうけて元宗は八月丁丑(二十二日)、起居舎人の潘阜を起用し、モンゴルの国書と高麗の国書を携えて日本に遣わすこととした。翌月、潘阜と李挺に国信使・同副使の任命があり、江華島の江都から日本に向けて出発した。元宗はその次第を折から新年の賀のためにモンゴルの都を訪れた高麗王弟の安慶公涓に託して報告させた。⁽⁸⁾ しかるに至元五年正月辛丑(十九日)、安慶公涓は世祖から手厳しい面責を被ることになった。世祖は高麗国王によって言葉巧みに欺かれたと安慶公涓に辛く当たったのである。⁽⁹⁾ 二月壬寅(二十一日)、安慶公涓がモンゴルから帰還すると、元宗に世祖の言葉をそのまま伝えた。その憤懣に溢れた口吻は安慶公涓を介してではあれ『高麗史』に残されている。高麗に対して以前の約束の不履行を責めるもので、爾の国が本当にモンゴルに降ったのであれば当然我らのために出兵し兵糧を提供すべきであるという。さらに爾は日本と未だかつて交流したことがないと朕を欺いたのか、爾らの奏したことは妄説ばかりだからこちらから答える必要はないと突き放している。⁽¹⁰⁾

安慶公涓が高麗に向かって出発したのを追うように、世祖は別途高麗国王のもとに使臣二名(于也孫脱・孟甲)を遣わして詔書をもたらし、高麗の重臣金俊と李藏用を指名してその使臣(去使)と同道して来たり高麗が真に意図すると

ころを回答するよう要求した。これは『元高麗紀事』に載せる至元五年正月二十八日の高麗国王王禎宛の詔に相当する。⁽¹⁾
使臣の到着は三月壬申（二十一日）であった。⁽¹²⁾ 詔の冒頭にいう。

朕惟天道難諶、人道貴誠、而卿之事朕、率以飾辭見欺、朕若受其欺而不言、是朕亦不以誠遇卿也。故與卿弟湄面數其事、無有所隱。

朕^{おも}惟うに、天道は予測し難く、⁽¹³⁾ 人道は誠実を貴ぶものであるが、卿が朕に事^{つか}えるのをみると、率ねきれいな言葉で欺かれており、朕がここで若しその欺きを受けながら何も言わないとなれば、それはそれで朕も亦た誠実でもって卿を遇していないことになる。だから卿の弟の湄に対して目の当たりに咎め立てて、隠すようなことをしなかったのだ。

そしてモンゴルが半島から撤兵すれば、三年のちには江華島の都から出て旧都開京に復帰する（去水就陸）との約束が果たされていないこと、さらには太祖チンギス以来の法制では内属国として果たすべき原則、すなわち人質を納^いれ、軍兵を援助し兵糧を提供し駅伝を設置し、戸籍を編成報告し、長官（達魯花赤^{ダルガチ}）を置くなどの義務が果たされていないことへの不満を述べ、とくに南宋攻撃を念頭に士卒・舟艦の助勢を要求している。⁽¹⁴⁾ モンゴルの要請に応じて早速李蔵用が四月丙戌（五日）、于也孫脱に従ってモンゴルに赴き表文を提出した。⁽¹⁵⁾ この上奏は金^{キム}壇『止浦集』巻二に「詔責兵船陳情表」として見え、安慶公攄の帰国に伴う伝言も含めて謝意を表し、使臣の齎^きした世祖の数々の指摘にはいずれも鋭意努力することを約束し、金俊は旧都の再建に忙しく且つ自身の病氣のこともあって長途の旅に堪えないことわっている。⁽¹⁶⁾ 但し金俊の事情については実は偽りの口実にすぎなかった。

五月二十九日には世祖と李蔵用の間で個別の課題にも及んでかなり突っ込んだ対話があり、『元高麗紀事』にやり取りが記録されている。⁽¹⁷⁾ まず世祖は助勢すべき軍数を取り上げた。太宗末期に人質としてモンゴルに来てかねて高麗兵の

協力出兵に熱心であった永寧公王綽（ホエン）が高麗王直屬の軍四万と雑色の軍一万、計五万が供出可能とした見解に基づきながら、四万の軍で助勢するようにとの要求であった。李蔵用は四万もの軍数には実態がなく到底応じることが不可能だと言った。世祖は爾らの「模糊之言」で来奏したのが原因であり爾らは「姑息之計」で事を遅延しようとしているのではないかと叱責し、軍を出す先が南宋あるいは日本にかかわらず出軍を要求した。「爾らは常に舟楫を用いているのだから難しいことはあるまい」、「君臣は一家であり、爾の国の有事の際に朕が救わないでどうする。若し朝廷がどこかに出軍しようとするときに、爾らとしても軍隊を出して戦いを助けるのは当たり前である」と言った。ついで三四千石を積載できる新造で堅牢な舟艦千艘を建造する要求である。本件については李蔵用は善処を約束したが、建造に従事する人夫の不足で納期に間に合わない恐れがあるとした。すると世祖は近い例として西夏（河西）が女真（金）・回回討伐に全面協力を約束しながら果たさず、ために亡国に至ったとの歴史をひきながら、高麗がその轍を踏まないようにと示唆した。李蔵用は重ねてモンゴルとの戦乱の結果として軍数の供出困難を訴えた。永寧公綽がなお口を挟もうとするのを抑える形で、世祖は李蔵用に向かって要求をしかと国王に伝えるよう申し渡してその場は終わった。翌六月乙巳（二十五日）、李蔵用はモンゴルの使者（ウドゥッチ）吾都止と高麗に還ってきたが、吾都止はここであらためて高麗が負担すべき戦艦の数を軍額を告知した。⁽¹⁹⁾

七月丁卯（十八日）、大宰府でしばらく待機していた高麗の使者潘阜が日本から返書を受け取るという成果は果たせないまま王廷に還ってきた。元宗は折しも節日祝賀のために孫世貞（閩門使）と呉惟頌（いせ）（郎将）をモンゴルに派遣するところであったから、潘阜を同行させて第二次日本遣使の次第を報告させることとした。この報告は一般によく知られているところで、前年（至元四年、元宗八年、一二六七）九月二十三日に発船して今年七月十八日に帰還したが、西偏の大宰府に五カ月間留め置かれたまま待遇は冷淡であり（館待甚薄）、日本側から返書（報章）は得られず、あれこれ説得

しても聴き入れられず無理やり帰国させられたという。⁽²⁰⁾ 孫世貞らはおそらく一カ月余りでモンゴルに到達し、潘阜も使命を果たしたであろう。その結果が第三次遣使につながる至元五年九月の動静であるが、それはのちに述べることにする。

七月二十日、モンゴルでは高麗に対して新たな具体的な動きが出てきた。脱朶児^{トドル}（明威將軍・都統領）・王国昌（武德將軍・統領）・劉傑（武略將軍・副統領）の三人の軍官に命じて、吾都止を送って来朝していた崔東秀（大將軍）とともに高麗に向かわせた。八月に高麗王廷に到着し元宗がこれを迎えると、軍官は「閲軍造船」の具体策を確認している。⁽²¹⁾ 軍官たちは分担して高麗側の協力のもと閲兵し、黒山・耽羅を調査し、また造船の進捗状況を視察した。黒山群島は朝鮮半島西南、木浦の西方にあり、中国との海上交通の要衝に当たる。とくに大黒山島には風待ちのための良港があつて重要であつた。⁽²²⁾ モンゴルはこれまで幾度となく高麗に対して軍兵と戦艦の負担の圧力を強めてきたが、いよいよ南宋攻撃が本格化し襄陽包囲戦が始まるこの時期における軍事作戦計画の一環であつた。彼らの高麗での活動は年内継続し、十二月丙申（二十日）、脱朶児は帰国した。⁽²³⁾

あくる日丁酉（二十一日）、事件は起こつた。金俊が弟の金冲らともども誅殺されたのである。金俊は崔氏の武人権力を支えてきたが、崔氏の内紛の機会に頭角を顕わし、配下の林衍と協力して自ら武人として権力を手中にした。モンゴルからのいや増す圧力に対しては快く思わず、モンゴルからの呼び出しにも応じず自宅で法要を営んでいた。將軍車松佑が提案したモンゴルの使者を殺害して海中に沈めようとの謀略を採用しようとして国王の賛同を得られず、その謀略は政府の中枢部にも知られていた。⁽²⁴⁾ また金俊が洪惟叙（国子学諭）を殺害した一件があるが、ここにも間接的ながら第三次日本遣使に随行した金裕らとの関わりがあつた。⁽²⁵⁾

モンゴルとの妥協線を探りつつ安定を目ざす国王元宗と臣僚たちにしてみれば、金俊はまことに危うく放置できない

存在であった。元宗は、金俊の配下にあつて三別抄の軍兵を収束していた林衍と結んで金俊誅殺の強硬手段に出たのであつた。ともあれこの変事は高麗国内で止めておくわけにはゆかなかつた。事後処理を誤ればまたモンゴルから非難を招きかねない。高麗がモンゴルの信用を維持するには、国王みずから正当な理由があつて金俊を誅殺したと報告する必要があつたのである。⁽²⁶⁾ 翌元宗十年（至元六年）正月に金俊の党与の誅殺や流島が行われた末に、庚申（十四日）、康允紹（大將軍）を世祖のもとに遣わし、権臣金俊・金冲らを誅殺した旨を報告させた。

総じてこの頃のモンゴルから高麗への使者の往來の状況を觀察すると、江華島の都（江都）に拠る高麗政府に対して「出陸」して旧都に復帰して内属国としての体制を整え、かつ南宋を主たる目標として兵力と兵糧によつて助勢すべしとするモンゴルからの圧力がきわめて強かつた。金俊の誅殺もそうした動きのなかで起きたことであり、それはやがて林衍の奪権、そして三別抄の叛乱へとつながつてゆく。モンゴルの日本との接触は、いわゆる「事元期」に入ろうとする高麗の切迫した政情のなかで生じていたことにとくに注目したい。

二 第三次遣使と塔二郎・弥二郎の拉致

至元五年（一二六八）七月に潘阜が高麗を發つてモンゴルに第二次遣使の結果を報告したのを承けて、至元五年九月、黒的・殷弘に命じて国書を齎して日本に遣使することが命じられた。もちろん高麗に日本まで案内せよ（導送）との命令である。⁽²⁷⁾ 十一月甲子（十七日）、ふたりの使者は高麗人申百川・于琬・金裕らと高麗に到着し、丁卯（二十日）、黒的是つぎのような世祖の詔を高麗国王に伝達した。『元高麗紀事』にいう。

詔曰、「卿來奏表、潘（復）〔阜〕等奉命日本、不得要領而還、未副聖慮、惶懼実深。朕謂向委卿導達去使、若送至

日本、彼或發還、或留滯、責不在卿、乃飾以偽辭、中道而還。卿前称大洋万里、風浪蹴天、不可輕涉、今潘阜何由得達、可羞可畏之事、卿已為之矣、復何言哉。今茲表奏、遣使至日本、逼而送還、此語又安足取信。今朕復遣中憲大夫兵部侍郎国信使黒的・中順大夫礼部侍郎国信副使殷弘等、充使以往、期於必達。卿当令重臣導送、毋致如前稽阻。」

詔にはつぎのようであつた。「卿は使者をよこして上表文を奏し、潘阜らが日本遣使の命を奉じながら、要領を得ずして還り、聖慮にかなわず、実に深く惶懼致しますと言つた。朕が考えてみると、さきに卿に委して使者を道案内させたのだが、もし使者を日本に送りとどけた場合、先方が強制送還しようと、抑留しようと、その責任は卿にはないにもかかわらず、卿はかえつて偽りの言葉で飾つて途中で還つてきた。卿は以前に大洋万里、風浪天を衝き、簡単には渡海できないと称していた。しかるにいま潘阜はどうして到達できたのか。羞はずべく畏るおそべき事を卿はすでにしているのに、また何をか言わんや。いまこうして使者を遣して日本に至つたのに強制送還されましたと上奏してきたが、この言葉にどうして信用を置けるものだろうか。⁽²⁹⁾いま朕はふたたび中憲大夫兵部侍郎国信使黒的・中順大夫礼部侍郎国信副使殷弘らを使者として行かせ、必ず到達するのを期している。卿はきつと重臣に案内させ、さきのように引き延ばしをしてはならぬ」。

高麗国王に対して日本遣使について以前に見せたような世祖の憤りは続いており、潘阜がモンゴル人を伴わなかったにせよ、日本に到達して最初の国書を届けたことにも評価の言はない。かえつて到達は困難だと言つていたところになぜ潘阜は到達できたのかと不信感を表わし、黒的と殷弘を必ず日本に送り届けるために、高麗の重臣を同行させて任務を達成するよう命じている。それに応じて元宗は十二月庚辰（四日）、申思佺（知門下省事）・陳子厚（侍郎）・潘阜（起居舎人）を遣わし黒的・殷弘を伴つて日本に出発させた。⁽³⁰⁾



図1 対馬北部図

『鎌倉遺文』古文書編卷一四、一〇三八〇
「蒙古来使記録」(称名寺文書)の前半につきの
ようにある。

文永六―二一十六、蒙古高麗使等渡海事。

蒙古人官人三人、同従人五人、高麗人
六十七人、船四艘、着対馬島豊岐浦云々。

同二―廿二、馳申了。同三―十三、評
定了。

同二―廿四、逃帰本蕃事^(畢カ)云々。

使者の日本到着は文永六年(至元六年、一二六
九)二月十六日であった。豊岐は豊崎で対馬の
北端部を指すとみえ、四艘の船団はそこから西
南に下り、当時の対馬の中心的院庁の所在地で
ある伊奈^{いな}に至った。当然水夫の漕力によって対馬海流を遡ったことになる。使者一行については『帝王編年記』卷二六、
文永六年条につきのような別の表記もある。⁽³¹⁾

三月七日、蒙古国使八人・高麗国使四人・従類七十余人、着対馬国之由、午時、自九国申六波羅云々。

どちらも伊奈院庁の役人が報告書に記載したところに基づいているはずである。使者が何らかの牒状を持参したはずであるが、それが伝達されたとの記録はない。ただ『五代帝王物語』に「去年の返牒なきに因て、左右をきかん為也。」とあるから、来使の目的はここで伝わったはずである。伊奈院庁から大宰府経由で京都に急使が送られ、翌月に評定が

行われたが、その結果が伝えられる前、二月二十四日に使者は早々に対馬を去った。

対馬退去の直接の原因は伊奈におけるトラブルである。⁽³²⁾ 従来とも予想はされていたところであったが、近年見出された(第四次遣使の際の)大蒙古国中書省の国書(牒)により細かい経過まではわからないが、使者側からみたトラブルの実相が明らかになった。同国書にいう。⁽³³⁾

不意纔至彼疆対馬島、堅拒不納、至兵刃相加我信使、勢不獲已、聊用相応、生致塔二郎・弥二郎二人以帰。……彼疆場之吏、赴敵舟中、俄害我信使、較之曲直、声罪致討、義所当然。又慮貴国有所不知、而典封疆者、以慎守固禦為常事耳。皇帝猶謂此将吏之過、二人何罪、今将塔二郎致貴国、俾奉牒書以往。

思いもよらなかったのは、境界あたりの対馬島に至るや、堅く入国を拒否し、我が使節に刃を向ける事態となった。(我が方としては)なりゆきのうえからやむを得ず、いささかこれに対応し、塔二郎・弥二郎の二人を生け捕りにして帰国した。……かの国境の役人が敵舟のうちに赴いて、突然我が使節を傷害するなどは、ことが正しいか誤っているかという点からすれば、公然と相手の罪をせめて討伐にのりだしても当然のところである。さらによく考えてみれば、貴国において承知しておらず、国境警備に当たるものが職務上ひたすら固く防禦しただけのことかもしれない。皇帝はそれでも、これは下級の役人の過まちであって、二人のものには罪はないとお考えになり、いま塔二郎らを貴国に送り届け牒書を奉じて行かせることとした。

従来とも塔二郎・弥二郎が拉致されて高麗からモンゴルの燕京に至り、世祖フビライに引見され言葉を交わしたことは知られている。ここで筆者はいま少しこの事実を周辺の事情と突き合わせてその歴史的意味について考えてみたい。

そこでまず日本の史書から確認してゆきたい。対馬藩士平山東山(二七六二―一八一六)の『津島紀事』^{かみあが}卷五、上県郡記、伊奈郷、志多留村、寺院、廢寺に「報恩寺」という曹洞宗の寺院についてつぎのような記述がある。

土俗略称報寺、報又作法。弘安七年甲申九月、蒙古世祖王使黒的・「殷」弘侵本州、来寇志多留、州兵拒之、蒙古賊逃去、捕（藤次）「塔二郎・弥二郎」二人以還云。元史（志）「誌」至元五年、当本朝文永五年誤矣。

土俗、報寺と略称し、報を又法に作る。弘安七年甲申九月、蒙古世祖王、黒的・殷弘をして本州を侵さしめ、来りて志多留に寇し、州兵これを拒む。蒙古の賊逃去し、塔二郎・弥二郎二人を捕えて以て還ると云う。元史に至元五年と誌し、本朝の文永五年に当り誤れり。

引用末尾の細字の注は「弘安七年」の紀年の誤りを『元史』日本伝によつて訂正したものであるが、実際に日本の対馬に到着し塔二郎・弥二郎を捕えて還つたのは至元六年（文永六年）であつた。また九月でもない。⁽³⁴⁾塔二郎・弥二郎の別の表記も想定しうるが、いまは『元史』日本伝の表記に従つておく。この記事によつて両名は志多留の人と伝えられているが、志多留は伊奈に隣接する村である。『津島紀事』に「州兵」とあるように、地方の行政官庁所属の兵士と衝突したわけである。トラブルの経過からして塔二郎・弥二郎は島民には違いないが、恐らく武力をもつて対抗した末に捕えられた、院庁の職を帯びた下級の官人と推測したのである。⁽³⁵⁾

対馬で宗氏が勢力を拡大する以前の古代から中世初期の体制のもとで、伊奈は重要な地理的位置にあつた。伊奈には今も門名で「在庁」と呼ばれる阿比留姓の家があり、伊奈院ともいつて対馬の在庁官人であつたという。⁽³⁶⁾モンゴルの使者が伊奈あるいは志多留に来たり、またここで騒動が起こつて塔二郎・弥二郎の二人が拉致されたのは当地が対馬の中でも要地だったからにほかならない。

第三次遣使の使命を担う黒的・殷弘やその輔佐を高麗国王から命じられた申思佺は結局九州の大宰府には赴かず、至元六年（元宗九、文永六、一二六九）二月二十四日、伊奈から塔二郎・弥二郎を拉致して高麗に向け対馬を去つた。モンゴル国の期待としては日本側の正式な対応を得て「奉書遣使」に繋げること、少なくとも返書（返牒）を携えて帰国報

告することであつたろう。一行の行動の判断には潘阜が大宰府で日本からの返書待ち続けた経験も大いに影響したであらう。もしも九州に渡れば伊奈における衝突の規模では済まない、新たな紛議を抱えたまま帰還したくはない、大宰府で長期間逗留させられる懼れがある、それらが世祖から失態として罪に問われる可能性がある等々の不安葛藤の要素があつただろう。高麗の重臣申思侏にしても、金俊誅殺の半月前に出発して、政変の報が彼に届いていたかは不明であるにせよ、できるだけ早く高麗政府に戻りたかつたに違いない。皇帝フビライを納得させるに足る遣使実行の確かな証拠、それが日本人塔二郎と弥二郎であつた。

三 塔二郎・弥二郎の旅程（二）江都から燕京へ、世祖との対話

塔二郎・弥二郎は至元六年（元宗十、文永六、一二六九）二月に対馬から高麗の江都を経て燕京に赴き世祖に引見され、もとのルートを経て第四次遣使の金有成とともに同年九月に日本に帰還した。半年に及ぶ大旅行の経過をたどってみたいが、二人に即した記録は多くない。そこで日付が明確なものを基準にしておおよその旅程を推定し、関連する事項を併せて考えてゆきたい。基準となる時点の記事はつぎのようである。

二月二十四日 塔二郎らを拉致し伊奈を退去。（『鎌倉遺文』）

三月十六日 黒的・申思侏らが対馬島に至り倭二人を執とらえて還る。（『高麗史』）

四月三日 申思侏を遣わし黒的を伴い倭二人を以て蒙古に如ゆく。（『高麗史』）

五月十六日（？） 禰まが復た申思侏を遣わし表を奉じ、黒的に従したがひ來朝（27）。（『元高麗紀事』）

六月 高麗の金有成に命じ執えし者を送還せしめ、中書省をしてその国に牒とせしむ。（『元史』日本伝）

六月

大蒙古国中書省の日本国王宛牒の月次。〔異国出契〕

七月二十一日

蒙古の于婁大・于琰ら六人が倭人と偕に來り、涇が郊に出迎。〔高麗史〕

八月

慶尚晋安東道按察使の日本国大宰府守護所宛牒の月次。〔異国出契〕

九月十七日

異国船一隻が対馬島伊奈浦に來着。〔鎌倉遺文〕

何ゆえに筆者が旅程のような細事に拘るかという点、ひとつには塔二郎・弥二郎の二人の日本人は使者ではないが、世祖フビライに実際に会って親しく言葉を交わしたという事実、いまひとつには二人の旅の間に高麗王廷で大事件が出來し、それはモンゴル・高麗關係史上の重大な転換に連なるものであったからである。このことは同時にひき続く日本への遣使や遠征の背景を成していたに相違ないとも思う。塔二郎・弥二郎の旅行・見聞の細部は知られないから、これまで歴史的考察の材料として取り上げにくかったかもしれない。諸事の脈絡・関連のなかでその時代と環境を推察し、できれば歴史叙述の素材に加えたいとの筆者の願いである。そのために表「東アジア情勢と塔二郎・弥二郎の軌跡」を作成した。

対馬―江都―燕京（当時の中都）の往復の旅程を推測しようとするのだが、江都・燕京間の往復については、至急便を含めて史料的に明らかにできるケースが複数存在し、鴨緑江の水勢に左右されることもあるが、ほぼ一カ月余りを要したとみてよい。対馬・江都間についてはこの場合二十日余りと考えておく。そこから往路の江都、燕京、帰路の江都における滞在期間が推測できる。但し燕京到着と出発の時点が史料的に不明確なために、燕京滞在期間の推定は伸縮可能となる。五月半ばに塔二郎・弥二郎が世祖に会ったとして、滞在は短ければ半月ほど、長ければ一カ月余りではないかと考えている。

まず二人の日本人が世祖フビライに接見されたことについてみておこう。『高麗史』卷二九、元宗世家、元宗十年七

表 東アジア情勢と塔二郎・弥二郎の軌跡

		蒙古・高麗情勢	日本・塔二郎・弥二郎関係
1268年（至元 5、高麗元宗 9、文永 5）			
12月	4日		申思侏・陳子厚・潘阜・黒的・殷弘が日本に出発（第3次遣使）
	21日	金俊を誅す	
1269年（至元 6、高麗元宗10、文永 6）			
正月	14日	蒙古に金俊誅殺を報告、使者康允紹	
2月	16日		蒙古官人3人・従者5人・高麗人67人、船4艘対馬豊崎に着く
	24日		倭人塔二郎・弥二郎を拉致、蒙古使節撤退
	27日		北条政村（執権）・時宗（連署）が警戒呼掛けの文書
3月	5日		北条時宗が執権就任、政村は連署
	16日		黒的・申思侏が倭二人を執えて江都に帰還
		蒙古が襄陽の鹿門山に築堡	
4月	3日		申思侏を遣し黒的を伴い倭二人を以て蒙古に行く
	20日	世子諶を遣し蒙古に入朝。蔡植・林惟幹・鄭子璵らが従行	
	26日		院評定。蒙古国国書・高麗国国書、返牒如何
5月	2日	慶尚道按察使の馳報。日本が兵船を準備、攻撃の虞れ、海防	
	16日?		高麗国王禎が申思侏を遣し表を奉じ黒的に従い来朝
	中旬?		塔二郎・弥二郎が世祖に拝謁
		馬亨の議、高麗・日本・南宋対策	
6月	2日	世子諶が蒙古に来朝	
	上旬?		大蒙古国中書省牒が発せられる（第4次遣使）。金有成に倭人を送還させる方針
	17日	林衍が宦者金鏡・崔恩を殺し張季烈・奇蘊を流島す	
	18日	林衍が不軌を謀り大事を行わんとす（林衍クーデタ）	
	21日	林衍が三別抄を率い安慶公涓の第に詣る。百官が涓を王とす	
7月	3日	涓が林衍を教定別監とす	
	8日	林衍が蒙古に王遜位を報告の使節派遣、使者郭汝弼	
	12日	涓が王を太上王とす	
	21日		蒙古の使者于婁大ら6人が倭人とともに江都へ、涓が郊に出迎
	24日	世子諶が帰国途中で蒙古に引き返し世祖に哀訴、郭汝弼を執う	
8月	1日	李蔵用を蒙古に遣し節日を賀す	
	2日?	世子が鄭子璵に書を託し国人に諭す、王復位が順安侯惊を立つか	
	25日	世子が来り臣下が君を擅廃すと奏す。蒙古が韓朶思不花・李譔を遣し詳問せしむ	
	中旬?		慶尚道按察使から大宰府守護所宛の牒（第4次遣使）
9月	7日	林衍が金方慶・崔東秀を蒙使とともに蒙古に遣す	
	16日	世子王諶を上柱国・東安公に任命	
	17日		異国船1隻、金有成一行が伊奈浦に至る
	22日	枢密院・御史台上奏：高麗出兵、王諶支援のこと	
	24日		大宰府守護所から鎌倉幕府へ報告。高麗使一行は大宰府守護所に留置
	25日	王諶に命じ兵3000を率い国難に赴かしむ。諶は東安公を辞す	
	28日	宋仲義（管軍戸）に勅し高麗を征せしむ	

10月	1日	林衍が柳歌・張季烈・奇蘊を釈す。京に至る前に他島に流す	
	3日	崔坦らが林衍を殺すを名とし龍岡・咸從・三和で叛す	
	9日	沮が李君伯・玄文革に150人を率い西北に遣す	
	15日	黒的・徐世雄を遣じ、王禎・王沮・権臣林衍を俱に闕に赴かしむ	
	中旬?	国王頭輩哥に命じ兵を以て境を圧す。趙璧：東京行中書省。高麗国軍民に詔諭す	
	25日	世子謙に特進上柱国を授く	
	28日	陳子厚を蒙古に遣し賀正。附奏：権国王沮の大蒙古国皇帝宛文書	
11月	2日	樞密院が高麗を征するを議す	
	2日	崔坦が林衍作乱を以て西京の50余城を撃ち来附	
	6日	王緯・洪茶丘の軍3000を簽し高麗を定む。さらに軍勢増強	
	11日	蒙古が黒的・徐仲雄ら12人を遣し来る	
	14日	高麗の宰相が林衍の第で詔書に答えるを議す	
	17日	黒的らが高麗に至る	
	21日	林衍が黒的らを私第で宴す。林衍が王の復位を言う	
	22日	王が黒的らを宴す。王と黒的の座位の問題	
	23日	禎が詔を受けて復位	
	23日	禎が朴杰を遣し黒的に従い表を奉じ入朝を決定	

月甲子（二十一日）条にいう。

蒙古使于婁大・于琰等六人偕倭人来、沮出迎于郊。初申思侏与倭人謁帝。帝大喜曰、「爾国王祇稟朕命、使爾等往日本、爾等不以險阻為辭、入不測之地、生還復命、忠節可嘉。」厚賜匹帛、以至從卒。又謂倭人曰、「爾国朝覲中国、其来尚矣。今朕欲爾国之来朝、非以逼爾也、但欲垂名於後耳。」賚予甚稠、勅令觀覽宮殿。既而倭人奏云、「臣等聞有天堂・仏刹、正謂是也。」帝悦、又使徧觀燕京万寿山玉殿与諸城闕。

モンゴルの使者の于婁大と于琰ら六人が倭人とともにやって来て、（安慶公）沮が郊外で出迎えた。

かつて申思侏は倭人とともに帝に拝謁した。フビライ皇帝は大いに喜んで言った。「汝の国の王は謹んで朕の勅命をうけ、汝らに日本に行かせたところ、汝らは風濤の險阻を口実とせず、不案内な地に入って生還し復命したのは、その忠節ぶりは結構なことである」。厚く褒美の匹帛を從卒に至るまで賜った。さらに倭人にはこう言った。「汝の国は中国に公式に挨拶することが久しく続いてきた。いま朕が汝の国の来朝を望むのは、汝の国に無理強いしようとするのではなく、ただその名声を後世

に遺そうとしているだけなのだ」。倭人に対する賜物は大変多く、勅して諸宮殿を觀覽させた。かくして倭人はフビライに奏上して言った。「私どもはこの世に天堂・仏刹ぶつさくが存在すると耳にしたことがありますが、まさにこのことだったのですね」。これを聞いてフビライ皇帝はご満悦で、さらに燕京の万寿山の玉殿など各種の宮城の施設をあまねく參觀させた。

これがフビライが塔二郎・弥二郎を接見した様子を伝える唯一の史料である。使者や日本人がモンゴルから高麗に帰着した史実に付随して、燕京での逸事が記されている。『高麗史』であるから当然この描写は高麗人の耳目を通して、具體的には申思佗らの報告の一端を伝えるものであろう。

ここから判明することは、まず世祖は眼前での日本人出現に大いに喜び、高麗の使者がようやく使命を果たしたことにくすぶる満足した。おそらく世祖にとってはそれまで日本についての現実感が決定的に欠落していたからであらう。かくして塔二郎・弥二郎に対しては、中国史上長らく日本からの来朝があったことを踏まえて、朕は日本の来朝を強制しようとするものではなく、両国交流の美名を後世に遺そうとしているだけだと語りかけた。もちろん重訳して日本人には伝えられたわけだが、この言葉自体がすぐれて外交的な表現である。世祖としては、言葉を聴いた二人の日本人が自らの意向を理解し帰国後にそれを日本の当局者に伝えることを期待し、またこの日本人に会ってその期待が叶いそうだと感じたのであろう。

ただ世祖の発言は何か類似した表現を想い起させる。すなわち至元四年（一二六七）の第二次遣使の際にはモンゴル皇帝からの国書に併せて高麗国王からの国書が添えられていたが、その国書の末尾にいう。⁽⁴⁰⁾

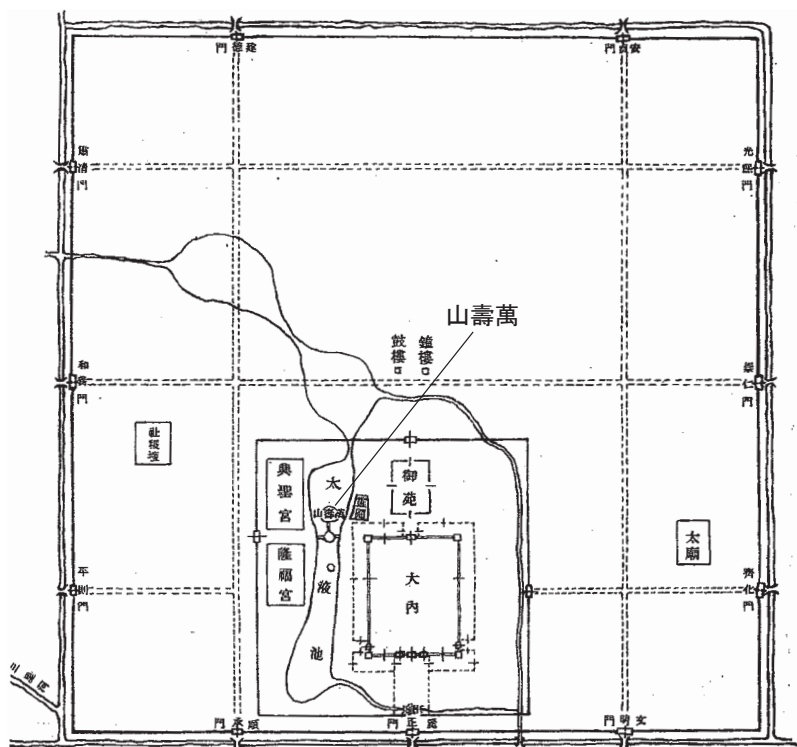
貴国之通好中国、無代無之、況今皇帝之欲通好貴国者、非利其貢獻、蓋欲以無外之名高於天下耳。若得貴国之通好、必厚待之。其遣一介之士、以往觀之何如也。貴国商酌焉。

貴国が中国に通好するのはいずれの世にもなかったことがない。ましてや現今、モンゴル皇帝が貴国に通好しようとするのは、その貢獻を利として得ようとするものではなく、（天下を家とする王者には）外というものがないとの名声を天下に高からしめんとするだけなのです。⁽⁴¹⁾ もしも貴国の通好を得たならばきつと厚く待遇されるでありましょう。ここは一介の使者を遣わして出向いて実際に見てはいいかがか、貴国はよく検討されたい。

日本人に向けた世祖の言葉は、あるいは高麗流の日本への期待を加味した翻訳であった可能性は残る。

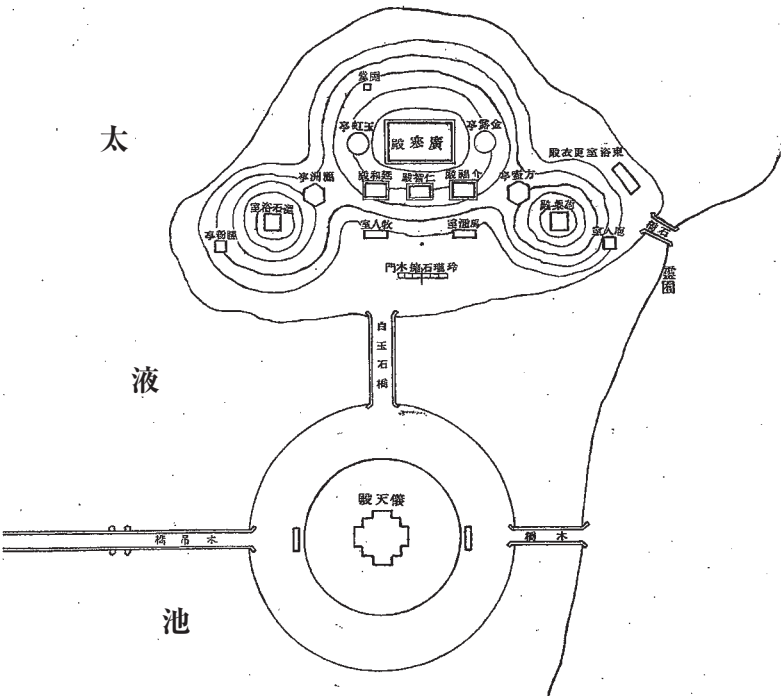
想像を逞しくしすぎるようであるが、塔二郎らの応答の内容に教養の片鱗が垣間見えると思う。世界には壮麗な「天堂・仏刹」が存在すると聞いていたという。仏刹はもとより仏教の大寺である。天堂とはやはり仏教用語で「天堂・地獄」と対置され、天上界ともいつて天衆（天上の神々）が住む殿堂のことである。⁽⁴²⁾ 二人の日本人は単なる俘虜ではなく、日本へ遣わされた使者のために証人を演ずる自らの運命を受け入れ、長途の旅行に耐える体力を有し臨機の会話もできる柔軟性を備えた青年であったと推測する。『高麗史』には二人の名は見えないものの、『元史』や元朝国書（大蒙古国中書省牒）に塔二郎・弥二郎の名が残されていること自体が一定の歴史的な役割を担ったことを物語っているだろう。しかも対馬におけるトラブルに関して「将吏の過にして、二人何の罪あらん」とあったように、皇帝の睿慮により塔二郎・弥二郎の二人に罪はないとする公式見解が声明されたのである。⁽⁴³⁾ 塔二郎・弥二郎は通称であって、或いは漢字二字の正式の名をもちうる者であった可能性も考えられよう。

満足した世祖はさらに万寿山の玉殿その他の建造物を見学させた。万寿山とは金代の瓊華島を改修した太液池に浮かぶ島であり、中央の山頂に広寒殿を置き、美しい各種の建造物が左右対称に配置されていた。⁽⁴⁴⁾ 至元二年頃から整備が進み、塔二郎らが見た玉殿も二年前に広寒殿中に作られたものであった。⁽⁴⁵⁾ 元朝一代を通じてここで帝室一族の封冊、格別な儀式、仏事、遊宴などが取り行われる舞台となった。この宮殿のさまは文人たちによって多く詩文に詠われている。



闕鐸「元大都宮苑図考」より

図2 元京城図



闕鐸「元大都宮苑図考」より

図3 元万寿山図

塔二郎らの燕京における行動は以上のほかには伝わらない。但し『元史』日本伝にみえるように、六月に高麗の金有成に命じて執えた者を送還させることとし、中書省に日本への外交文書（牒）を用意させ、それが第四次遣使における大蒙古国中書省の日本国王宛の国書であったから、六月中に塔二郎らは燕京を離れたのであろう。金有成は同文館所属の訳官であったから、申思佺に従って燕京に來たり、帰国に際して日本人を本国に帰還させる任務を賦与されたと考えられる。彼は第五次日本遣使にも趙良弼に従って書状官として來日したし、至元二十九年（正応五、忠烈王一八、一二九二）にも捕えられた日本商人を送還するために來日し、そのまま日本に留められてそこで歿した。⁽⁴⁸⁾

四 塔二郎・弥二郎の旅程（二） 帰路、高麗王廷の内変

塔二郎らが江都から燕京に出発して半月ほどのち、四月二十日、高麗の世子王諱が国王の命で蒙古に向かった。すでに金俊誅殺の緊急の上奏は済ませており、元朝との親善を主目的とする世子の派遣であろう。老臣蔡楨（参知政事）を筆頭に文武の高官や内官を伴う旅であった。⁽⁴⁹⁾六月二十二日、世子は燕京で世祖に拜謁し、世祖から国王王禎に玉帶、世子王諱に金五十両を賜わり、従官たちにも銀幣が与えられた。⁽⁵⁰⁾塔二郎らの一行は世子一行と燕京滞在中でなければ道中であれ遭遇したとみるべきだろう。

六月十七日から二十一日にかけて高麗王廷で大騒動が持ち上がった。林衍によるクーデタ、すなわち元宗廢立事件である。これについては池内宏氏が高麗の政治史上の意義と崔坦の乱ややがて三別抄の乱に連なる前段階の歴史として論じられた。⁽⁵¹⁾この局面の理解のために筆者も叙述を試みたい。

十七日、林衍はまず配下の夜別抄を差し向けて王の側近勢力を排除した。まず宦官の金鏡・崔璵を殺害し、また御史

大夫の張季烈と大將軍の奇蘊^{うん}を捕え流罪とした。金俊誅殺を元宗と協力して断行した林衍であったが、その後元宗の側近ばかりが力を得るのに不安を覚えて元宗と対立するに至ったのである。張季烈は王が深く信任するところで、奇蘊は王族と姻戚関係にあった。翌日、林衍は三別抄・六番都房の兵を広場に集め、その圧力のもと宰相の会議を開き、王が金鏡らと謀り自分を殺そうとしたので先手を打ったものだと言明し了解を求めた。宰相らの沈黙を破って、侍中の李蔵用は勢いの止めようがないのを察して国王の退位を認める発言をした。参知政事の俞千遇はかほどの大事はよくよく考えるようにと請い、世子がモンゴルから帰還するのを待っても遅くないではないかと言った。その場は何ら決定を見ずに散会したのだが、翌日夜に林衍は權守鈞（前將軍）・李叙（大卿）・金信祐（將軍）を捕え他の罪に託^{たく}けて斬刑に処し人々の心を震えあがらせた。二十一日、林衍は武裝して三別抄・六番都房の兵を率いて元宗の弟安慶公涓の邸宅に赴き、百官を集めて涓を奉じて王に推戴し、元宗と妃を別の宮殿に幽閉した^②。七月三日、林衍は涓によって教定別監に任じられ、八日には中書舍人の郭汝弼を告奏使としてモンゴルに遣わし、王祖が自らの意志で弟の涓に讓位した旨の事後報告「王遜位表」を世祖のもとに持ちゆかせた。十二日には元宗禪を太上王と称することとした。さきにみたように、安慶公涓はこれまでモンゴルに対して苦勞を重ねており、林衍の策に乗る余地はあったのだろう。

塔二郎ら一行が、正確にはモンゴルの使者于婁大と于琬ら六人が塔二郎・弥二郎とともに高麗の江都に到着したのは、前掲の世祖の接見についての史料に見たように七月二十一日であった。このとき国都の郊外に出て使者一行を迎えたのが安慶公王涓ならぬ新国王王涓であった。一行中の高麗の使者は当然王廷の異変を知り、高麗の官人だれもがそうであっただろうように、事態の激変に心中穏やかでなかったにちがいない。塔二郎ら日本人がそれを認知したかは不明であるが、察知しうる環境にはあったわけである。

さて世子諱は、塔二郎一行にやや遅れて燕京を出発して江都に向かった。七月二十四日、世子諱一行は鴨緑江の西の

国境の町婆^ば婆^さ府に至ったが、そこに静州の官奴^{くわんぬ}の丁伍^{ていご}孖^ふなるものが鴨緑江を渡って世子に林衍の変を告げた。世子は容易に信じる事ができなかったが、廢立を世祖に報告する使者郭汝弼がすでに靈州まで来ていると丁伍孖から聞き、同行のモンゴルの使者七人を靈州に差し向けて郭汝弼を捕らえた。さらに訳官の鄭庇^しから事の真相を聞いて痛哭しモンゴルに引き返すこととした。⁽⁵³⁾世子は鄭子璵^{しよ}（大將軍）に「国人に諭す」との書を託して江都に赴かせた。その書には父の王位を復すよう、さもなくば世子の弟の順安公^{そう}惊^{きやう}を立てよとあった。世子の書が高麗王廷に届いたのが八月二日である。⁽⁵⁴⁾

おそらく七月末か八月のごく初めに世子は世祖に会い、臣下たる林衍が勝手に廢立を行ったと哀訴した。世祖はさっそく幹朶思不花^{オロスブハ}・李諤^ハを高麗に遣わして調査（詳問）させることとした。⁽⁵⁵⁾「高麗国文武臣僚に諭す」の句に始まるその詔は調査というよりは叱責と指示というべきものであった。臣下による廢立などはない得ないことで、国王・世子とその一族に危害が及べば決して赦さないと明確な立場を伝えたのだった。幹朶思不花⁽⁵⁶⁾らが高麗王廷に到着したのは八月二十五日であり、その一行中に世子の書状官たる金応文がいたのは見逃せない。三日後の二十八日に幹朶思不花⁽⁵⁷⁾に対する公式の饗宴が行われた。九月七日、林衍はこの間の事情を釈明するため金方慶（樞密院副使）・崔東秀（大將軍）を幹朶思不花と同行してモンゴルに派遣し、九月末には燕京に到着したであろう。幹朶思不花の高麗への派遣の様子を見ると、緊急事態のため、片道二十日余りで両都の間を移動したとみられる。

ところが燕京のモンゴル政府では世子諶が働きかけて高麗に向けて出兵の動きが始まっていた。九月十六日には世子諶に対して上柱国・東安公の称が授けられ（但し東安公は同月中に辞す）、二十二日には樞密院・御史台の合同会議において世子諶の提議した高麗への出兵計画が審議された。二十五日には世子諶に命じ兵三千を率い国難に赴かせ、二十八日には管軍万戸の宋仲義に勅し高麗を征することとした。さらに王緯・洪茶丘の所管戸内からも軍士を選抜して派遣す

る準備が進められた。⁽⁵⁸⁾

十月になると世祖は黒的（中憲大夫・兵部侍郎）と徐世雄（淄萊路総管府判官）を遣わして「高麗王王禎及び僚属軍民に諭す」との詔をもたらし、王禎・王沮・林衍を燕京に呼び寄せて面前で実情を述べさせ皇帝の判断を聴かせることにした。同時に国王頭トレンカ輦哥に命じて国境方面に出兵して圧力をかけた。この際には「高麗国官吏軍民に諭す」として軍事圧力を背景に「汝の国を撫定する」意図を明示している。⁽⁵⁹⁾ 崔坦（西北面兵馬使營記官）が林衍討伐を呼号して叛乱を起こしたのは十月の初めのことであったが、世子の支持のもと彼はモンゴルに投じた。⁽⁶⁰⁾

十一月十一日、前記の黒的と徐世雄が高麗の都に到着すると、高麗王廷の様子は一変した。モンゴルの使者への接待・応接の間にクーデタの勢いはたちまち衰え、二十三日には旧王の王禎の復位が決し、禎は朴休（借礼部侍郎）を遣わし黒的に従って表を奉じ入朝させることとした。⁽⁶¹⁾ その表文で予告したように、十二月十九日、王禎はモンゴルに向けて出発した。しかし林衍は同行を拒んでいた。

翌年正月にはモンゴルは崔坦を重用しつつ西北面を占領し、西京（今日の平壤）を東寧府と改称して高麗における支配を名実ともに強固にしてゆく。元宗王禎復位の大きすぎる代償ともいえる。さらに二月、王禎はモンゴルの都堂への書簡で世祖皇帝に公主の降嫁を請うて、高麗がモンゴル・元朝に対して駙馬国となる端緒をひらいた。林衍は入朝して弁明すべしとのモンゴルからの再度の命令を拒否し、諸道に夜別抄を遣わして人民を諸島に居住させて抵抗の態勢を準備した。しかし二月末に林衍は憂憤のうちに背に疽（きず）を病んで死去した。⁽⁶²⁾ 元宗の燕京行の留守を預かる監国の順安公棕によって、林衍の子林惟茂が教定別監に任命されたが、モンゴルに対する姿勢をめぐって高麗政府の内紛は続いて林惟茂が暗殺され、やがて三別抄の解散命令への抵抗からいわゆる三別抄の乱へと連なっていくのである。

五 第四次遣使、塔二郎・弥二郎の帰還

さて塔二郎・弥二郎らは至元六年（一二六九）七月二十一日に燕京から江都に到着してからどれほどの期間そこに留まったか、つまり江都からいつ日本に向けて出発したかが明らかでない。分かっているのは、慶尚道按察使の大宰府守護所宛牒の発給が八月とあり、九月十九日に金有成が塔二郎らと対馬の伊奈に着船したことである。ここでは金有成の江都出發は八月中旬と推測しておく。塔二郎・弥二郎の江都滞在中の動向は一切伝わらない。しかし上述のように林衍のクータによる高麗国王廢立の騒動は同年六月末から十一月末までであり、いまや捕われ人ではない塔二郎・弥二郎であってみれば、二人が高麗王廷に生じている異変を何ほどか察知していたと考えることは可能であろう。

つぎに注目したいのは慶尚道按察使の大宰府守護所宛牒である。慶尚道はまさに日本との外交の窓口ともいえる位置にあった。高麗国王名の国書以外では第二次遣使の際の潘阜・李挺による牒状（至元五年正月）に次ぐものである。これに前後する慶尚道按察使に関する動向を見ておこう。至元六年五月二日には慶尚道按察使崔沼からの緊急情報にもとづき日本に対する警戒強化策を決定した。済州（済州島）の住民が漂流して日本に至り実見したところを報告したもので、日本が兵船を準備して我が方を攻撃しようとしているというのである。この通報をうけて、高麗政府は海防、食糧備蓄、貴重書避難などの対処策を講じたのであった。⁽⁶³⁾ 張東翼氏は『慶尚道按察使先生案』に拠って慶尚道按察使として牒文を草したのは金之卿とされた。⁽⁶⁴⁾

また林衍・林惟茂が慶尚道などでも元朝に対する抵抗工作を策したことについては『高麗史』卷一三〇、林衍伝にはいう。

衍所遣夜別抄至慶尚道、督民入保諸島、按察使崔（淵）〔儒〕与東京副留守朱悦・判官嚴守安、謀執夜別抄囚金州、

以待王還。

林衍が遣わした夜別抄が慶尚道に至り、人々を督促して諸島に入り守らせしたが、按察使の崔儒は東京副留守の朱悦・判官の嚴守安と謀り夜別抄を捕縛し金州に監禁して王が帰還するのを待った。

これは林衍歿後に林惟茂が教定別監に任じられた後のことで、元宗十一年（一二七〇）前半の出来事である。林衍伝にみえる按察使の崔潤とは『慶尚道先生案』などによれば崔儒が正しく、彼は林衍の仕事を阻止して情勢が落ち着くのを待っていた。⁽⁶⁵⁾

慶尚道按察使の発した文書の内容についても張東翼氏が解説されている。筆者は基本的にこれが高麗の最終的な送り出し地の官府から日本の受け取り地の官府たる大宰府守護所宛の事務的文書であると考えるが、なお文面から汲み取るべき事柄もあると思う。尚州牧将校・晋州牧将校各一名に護送させる件については、これが江都から韓半島南端に到着するまでに尚州と晋州を経由した旅程を反映すると思う。また張東翼氏がモンゴルを「北朝」と表記することについて「自らをモンゴルに対する臣属国と認めよう」としない高麗人の姿勢」と評価されることは、平明にモンゴル国を「北朝」と称する実務的文章そのものとも読めると思う。⁽⁶⁶⁾

むしろ筆者が注目したいのは牒の末尾の「凡其情実、可於此人聴取知悉。」の一文である。筆者は敢えて「あらゆる実情はこれらの人から聴取のうえよくよくご承知ありたい」と訳した。⁽⁶⁷⁾「此人」とは明らかに塔二郎・弥二郎の二人の日本人を指すから、慶尚道按察使金之卿は自らの職責の範囲に踏み止まりながらも、塔二郎らの帰国後における情報開示に何ら支障のないことを言明している。あるいはモンゴルからする高麗への圧力や高麗国内において現に生じている特殊な事情を日本の当局者に理解してほしい気持ちが進められていたのかもしれない。

その第四次遣使の日本への到着については、『鎌倉遺文』古文書編卷一四、一〇五七一「日本国太政官牒」（『本朝文

集』卷六七、「贈蒙古国中書省牒」のはじめの部分にいう。

日本国太政官牒。蒙古国中書省 附高麗国使人牒送牒。得太宰府去年九月二十四日解状、去十七日申時、異国船一隻、來着対馬嶋伊奈浦、依例令存問來由之處、高麗国使人參來也、仍相副彼国并蒙古国牒。

この文は大モンゴル国中書省からの牒（国書）に対する返書（太政官牒）として菅原長成によつて文永七年（一二七〇）

に起草されたが、最終的に發給するには至らなかったものである。しかしその時点までに起きた事実については正確に言及しているとみられる。すなわち太宰府からの文永六年（一二六九）九月二十四日付の解状によれば、同月十七日に異国船一隻が対馬の伊奈浦に來着し、高麗国の使者が高麗ならびに蒙古国の牒を携えてやつて來たとある。高麗国の使者とは金有成にはかならず、わずか一隻で対馬の伊奈に到來した。塔二郎・弥二郎が対馬から拉致されたのは同年二月二十四日であつたから、足かけ七ヵ月、実日数は百八十日、半年ぶりに故郷に歸還したことになる。塔二郎・弥二郎の確からしい消息はこれ以後明らかでないから、二人は幸いに伊奈か志多留の自宅に歸つたと考えられてきたのかもしれない。しかしその問題はのちに改めて考えてみたい。

さきに『鎌倉遺文』卷一四、一〇三八〇「蒙古來使記録」（称名寺文書）の前段を引用したが、それは第三次遣使の時系列の簡略な記録であつた。とすれば後段は第四次遣使に関する記録でなければならず、つぎのようである。

文永六―十一―十七、蒙古牒一通、高麗牒一通持之牒使二人、令着対馬嶋之由申之云々。彼至元六―六―一日、而如院宣者、通好之儀、准唐漢之例、不可及子細、但彼国与我国、自昔無宿意、用兵之条、甚以不義之旨、可被遣返牒也。且草者可長成卿之由、諸卿評定之由云々、而関東評定了、先度牒使來朝之時、不可返牒之由。

ここにみえる「文永六―十一―十七」（文永六年十月十七日）とは従来、モンゴル及び高麗に対して返牒すべきか否かを審議した院評定の日付けと考えられてきたようである。金有成が対馬に到着してからちようど一ヵ月後に當たる。筆者は

これを前掲の『鎌倉遺文』一〇五七一「日本国太政官牒」に「去十七日」とあるのと考え併せて、はじめの「十」字を「九」字に改めて「文永六年九月十七日」と理解できないかと考えた。さきに見たように「蒙古来使記録」の前半の記録の冒頭、すなわち「文永六二一十六」が第三次遣使の際に使者が対馬に到着した時点を示しているのと形を同じくして、第四次遣使の金有成が対馬の伊奈に到着した時点を指すはずだと考えたのである。

また「至元六六一日」は「至元六年六月日」であり、まさに金有成がもたらした大蒙古国中書省の牒（国書）の末尾にみえる年月日の示し方と同一である。となれば「彼^かの至元六年六月日」とは大蒙古国中書省の牒そのものを指すことは明らかであるから、引き続き文には第四次遣使の際の国書に対する日本側の反応と対処が書かれていなければならぬ。まず「院宣」によれば、中国との通好については「唐漢」（漢唐）の例に準拠するようでありながら仔細に言及されているわけでもない⁶⁸。但し中国歴代王朝と日本との間には従来格別にわだかまりがなかったにも拘わらず、日本に對して「用兵⁶⁹」するなどとは大変筋の通らないことであるからきつと「返牒」する必要がある。起草者は「菅原」長成卿である。諸卿が評定した。しかるに「関東」では評定して牒使（金有成）が来朝の際に返牒すべきでないとした。大約このようなことが書かれているのである。

日本側では当初、金有成らを対馬に止めて大宰府に來航するには及ばずと考えたようである。『鎌倉遺文』一〇五七一「日本国太政官牒」の末尾に「奉敕、彼到着之使、定留于対馬嶋」とあり、同じく前掲の一〇三八〇「蒙古来使記録」にも「牒使二人、令着対馬嶋」とあるからである。しかしながら金有成が対馬の伊奈から大宰府（大宰府守護所）に來たことは確かである。『元史』卷一〇八、日本伝にいう。

（至元）六年六月、命高麗金有成送還執者、俾中書省牒其国、亦不報。有成留其太宰府守護所者久之。

（至元）六年六月、高麗の金有成に命じて執^{とら}えた者を送還させ、中書省をして其の国に牒させたが、やはり返報さ

れなかった。有成が其の大宰府守護所に留められたのはずいぶん長かった。

金有成は日本側からの返牒を期待して大宰府において長逗留を余儀なくさせられたにちがいないが、いつ帰国したかは明らかでない。ただ前述のように幕府の評定により返牒を遣わさずと決したのであれば、菅原長成の起草した蒙古国書省宛の牒が「文永七年正月」とあり、高麗国宛の牒が「文永七年二月」とあるから、おそらく文永七年（至元七、元宗一一、一二七〇）二月以降であらう。⁷⁰

また『関東評定衆伝』（『群書類従』巻四九）にいう。

（文永六年）九月、蒙古・高麗、重牒状到来、牒使金有成・高柔二人也。還対馬嶋人答二郎・弥二郎。高柔依霊夢献所持毛冠於安楽寺、即叙其由呈詩。

短い記事であるが、蒙古と高麗からの再度の牒状が届き、使者は金有成・高柔の二人であること、拉致されていた対馬島の人である答二郎・弥二郎を返還したこと、そしてエピソードとして高柔が霊夢のお告げにより持参の毛冠（モンゴル風か？）を大宰府安楽寺に献上し、その次第を詩に表現したことが簡明に記されている。

さて塔二郎・弥二郎はどうなったか。その消息として彼らの名を出して伝えるところは多くない。日本側の史料としては以下に掲げるくらいである。『五代帝王物語』にはいう。

同六年、蒙古使、高麗の船に乗て又対馬国に着く。去年の返牒なきに因て、左右をきかん為也。不慮の喧嘩いできて帰国の間、対馬の二人とられて高麗へ渡る。高麗より蒙古へつかはしたれば、王宮へ召入て見て、種々の禄をとらせて本朝へ返送。^{（かへしおくる）}是に付て又牒状あり。

また『歴代鎮西要略』巻二にはいう。

（文永）六年己巳、蒙古之船来対馬、捕塔二郎・弥（三）（二）郎帰、是為尋問日本事云々。其後二人受持禄物来。

(文永) 六年己巳、蒙古の船対馬に來り、塔二郎・弥二郎を捕えて歸り、是れ日本の事を尋問せんが為なり云々。其の後二人禄物を受け持ちて来る^{きた}。

いま注目するのは二人の帰還に関する部分であるが、この史料からは対馬に歸ったことは知られても、大宰府で彼らが事情を聴取されるなどのことがあったかは明らかでない。従来の諸研究や一般向けの概説書でもほとんど対馬の島民が還ったところでストーリーは終わっている。それはひとえに大宰府に來たとの確かな記述が見当たらないからである。これまで見てきたように塔二郎・弥二郎が得たと思しい見聞・知見は無視するにはあまりに惜しいものではなかったか。まして慶尚道按察使の金之卿が日本の当局者に向かつて詳細な事情は彼らから聴取できますと書面で明言している状況下にあつてをやである。

筆者はやはり塔二郎・弥二郎は大宰府に來たに違いないと思う。その意味はあとで考えるとして、上の日本史料に見える二人の帰還に関して検討しておこう。「禄」あるいは「禄物^{ろくぶつ}」とあるのは両史料が同じ情報に基づいて書かれた可能性を示すかもしれない。これはさきに見た『高麗史』に「賚予甚稠^{さいよせいぢう}」(賚予甚だ稠^{さいよせいぢう}し)とあつたところと対応し、要するに褒美の品である。世祖との対面の折に高麗人に対しては從卒にいたるまで厚く「匹帛」を賜つたというから絹織物である。塔二郎らに与えられたのも匹帛などの個人的費消にたえる絹織物などの衣料がほとんどであつたと推測する。さらに『歷代鎮西要略』に「是為尋問日本事」とあるのは注意されてよい。先方では二人に対して日本事情を詮索した。期待するほど目的が達せられたかは別として、高麗でもモンゴルでも二人の日本人から情報を得ようと努めたはずである。また『歷代鎮西要略』の撰者が異国との情報取取に——場合によっては漏洩も含めて——敏感であつたことをも物語るだろう。とすると、やはり大宰府から二人に関する情報が制限付きながら漏れ聞こえてきたものと憶測するのである。

ところで塔二郎らの返還については日本側から公式に謝意を表わそうとした。菅原長成の撰に係り、日本国大宰府守護所が高麗国慶尚晋安東道按察使宛に発給しようとして結局差し止められた返牒案（文永七年二月）がそれである。『鎌倉遺文』巻一四、一〇五八八「大宰府守護所牒」（『本朝文集』巻六七、「贈高麗国牒」の一節にいう）。

所偕返之男子等、蟻護送之舟、令至父母之郷、共有胡馬嘶北、越鳥翥南之心、知盟約之不空、感仁義之（云）「雲」露。前頃牒使到着之時、警固之虎卒不來、海浜之漁者先集、以凡外之心、成慮外之煩歟。就有漏聞、恥背前好、早加霜刑、宜為後戒。

偕に返す所の男子等は護送の舟を蟻し、父母の郷に至らしめ、共に胡馬北に嘶き越鳥南に翥ぶの心あり、盟約の空ならざるを知り、仁義の雲露に感ず。前頃牒使到着の時、警固の虎卒来らず、海浜の漁者先ず集い、凡外の心を以て、慮外の煩を成すか。漏聞あるに就きて、前好に背くを恥じ、早に霜刑を加え、宜しく後の戒めと為すべし。

修飾的な辞句を列ねた儀礼的な文章と見え、内容をかいつまんで要約すれば以下のようである。塔二郎・弥二郎の二名が故郷に送還されたことに対して信義ある約定と厚い人情に感謝の意を表わす。そして第三次遣使の際のトラブルについては、官庁の正規の兵卒がやって来なかったところに、海浜の漁民が押しかけて賤しい凡夫の心根から思いもかけない騒動になったもので、これについては厳罰に処して二度と不祥事を起こさないようにしたいと遺憾の意を表わしている。この文書の存在故に、塔二郎・弥二郎が身分のない庶民であり、二人が故郷の対馬に帰されたところで物語りが終息する印象を与えてきたのではないかと思う。筆者にはどうも塔二郎・弥二郎の件を「きれいごと」に仕立てて、外交的には早く一件落着にもってゆきたかった底意を見るように思う。もっとも最終的に発給されなかったのだからそれは完遂されなかったわけだが。

実際には日本の当局者（大宰府守護所）は兩名に対して取調べなり事情聴取を行ったに相違ないと思う。そもそもな

ぜ対馬で騒動を起こしたか、なぜ捕まったかから始まり、二人は知るかぎりのことを供述したであろう。その内容は想像を遙かに越えて新奇で貴重な情報に満ちたものでありえなし、また機微に触れて秘匿した方がよい部分も存在したであろう。旧来の異国観を揺るがすようなアジアの大局に関わる情報もあったかもしれない。当局者としてはそうした情報が無制限に外部に洩れ出すことに警戒しなければならなかった。そこで両名には自ら罪を犯したとまで納得させられたかはわからないが、嚴重な緘口命令を以て対処したと思う。その供述内容は限られたもののみが知り得る、口外無用の極秘扱いとした可能性があろう。

モンゴルあるいは高麗は塔二郎・弥二郎をどう見たかったか、また扱いたかったのだろうか。日本側の「奉書遣使」の姿勢を引き出すために二人を外交のカードとして使うこと、つまり両人の手段化ではなかったかと考えられる。塔二郎・弥二郎がモンゴル国の首都で皇帝に謁見したことなどは方向性からみれば和平の匂いのする事実である。日本に対して和平を標榜しつつ働きかけるのも対日積極策の投影である。しかし鎌倉幕府としては二人が世祖から厚遇されたと認めるわけにゆかない。もしも認めれば、塔二郎・弥二郎に正規の使者に準ずる立場を賦与する結果になってしまうからである。情報公けになれば事が大きくなるから、ここは秘密のヴェールで覆ってしまふ。塔二郎・弥二郎が利用されることを極力避けようとしたと思われる。二人の送還を主旨として文書を送った大蒙古国中書省や慶尚道按察使への返牒差し止めの措置もそうした幕府の方針の反映であった。

あとに続く第五次遣使の使者趙良弼は至元八年（文永八、一二七二）に来日したが、そこでも塔二郎ら二人のことをしっかりと言及している。彼がもたらした国書（『元史』卷二〇八、日本伝）の一節にいう。

故嘗馳信使修好、為疆場之吏抑而弗通。所獲二人、敕有司慰撫、俾齋牒以還、遂復寂無所聞。

そこで以前、信使をいそぎ遣わして好みを修めようとしたところ、辺境の役人によって邪魔立てされて通ずること

ができなかった。捕獲した二人は、官司に勅して慰撫し、牒をもたらして還らせたところ、それっきりまた寂^{せき}として聞く所がない。

当然ながら第三次・第四次の遣使の結果を踏まえてこそ今次の遣使があることを強調しており、モンゴル側にしてみれば塔二郎・弥二郎の件が両国間の外交の一環に組み込まれているのは自明の理であった。

但し一方において趙良弼は前使に対する警戒も怠っていない。これについては山本光朗氏がすでに指摘しており、⁽¹⁾
『元朝名臣事略』巻一一、枢密趙文正公に趙良弼の墓碑を引用している。

前使が高麗、名為遣人護送、取道対馬・一岐等島、実漏密謀、益懼其日本既通、有以軋己也。公曲為防遏、使不得逞其計、自絶景島登舟、徑趨太宰府。

前使が高麗を通過する際に、人に護送させるとの名目で対馬・壹岐等の島經由のルートを取ったが、実のところ機密情報を漏洩したようで、日本がもう情報に通じていて自分を邪魔するのがいよいよ危ぶまれた。公は緻密に対策をしてその計略が遂げられないようにして、絶景島から船出して太宰府に直行した。

ここにいう「前使」とは金有成のみならず、実質的に第三次遣使をも含んで警戒しているとの意味であろう。趙良弼にとっては対馬が朝鮮半島と近いが故に日本人と高麗人（とくに三別抄のような反乱勢力も含めて）がこっそり情報をやりとりするのを危惧したものと思われる。絶景島は絶影島で、現今の釜山広域市の「影島区」であり、釜山湾の南西に位置するかつては島であったところであろう。日本にとってはモンゴルも高麗も後には共同して来寇したひとしく脅威の対象でしかないように思われがちであるが、モンゴルにとっては高麗もまた警戒すべき対象であった。

趙良弼についてはまだまだ考えてみなければならない課題が残されている。本稿ではもはや趙良弼について深入りする紙幅がないが、彼が関わって編成したと考えられる弥四郎と太宰府守護所関係者、計十二人の燕京往還の問題は重要

である。⁽⁷³⁾このことに塔二郎・弥二郎の経験の影響がなかったはずはない。日元外交史を語るうえで塔二郎・弥二郎の事績が外せないと考える理由はここにもある。

最後に塔二郎・弥二郎の事績が日本で史乘に伝わらないまひとつの理由には対馬の地域的事情もあるだろう。伊奈は日本の中世初期までは政治的また経済的にも枢要な地位を占めていた。それは朝鮮半島ときわめて近く、交流が深かったからであろう。問題は本稿で扱った時期が対馬における新旧勢力の交替期に当たっていたことである。寛元三年(一二四五)、在庁の阿比留平太郎が^{あびる}大宰府の下知に従わず、九州から^{これむねしげひさ}惟宗重尚が派遣されて翌年初めに^{けち}鷄知の戦などの衝突が起こった。重尚は自家の姓を改め祖母の姓を採って「宗氏」^{そう}を名のった。これは宗氏が対馬で覇権を確立した後、の宗氏関連の史料に見えるところで、史実というより創作された説話と解釈する考えもあるようだが、対馬を代表する有力な一族であった阿比留氏が宗氏に圧倒されていったことは確実であろう。しかし阿比留氏の勢力は駆逐されたわけではなく、代官として一定の地位を与えられ、また在庁と呼ばれて人々から尊重もされた。宗氏の勢力伸張には小茂田^{こもだ}浜の戦いなど宗氏一族一党のモンゴル来襲時の奮戦、そして犠牲も大いに与っていたと考えられる。⁽⁷⁴⁾塔二郎・弥二郎の記憶の希薄化や消失もそうした歴史の転変のなかで必然的に生じたとみるべきであろう。

むすび

史料に無かったり少ないことを述べるのは難しい。実証的に歴史を考究する姿勢を踏み外したかもしれないとみずから懸念もする。本稿で取り上げて論及したことには推論が多く、疑問に思われる点多かろうと思う。しかしこうも考えた。史料はたまたま残されたものであり、失われてしまった重要な史料はきっと数多いはずである。また重要な史料

が遺されなかったことにも歴史に関わる理由が存在するのではないかと。このような飛躍した試みが成功したかはわからない。ひとえに博雅の指正を乞う次第である。

注

(1) 張東翼「一二六九年「大蒙古国」中書省の牒と日本側の対応」(『史学雑誌』第一一四編第八号、二〇〇五、所収、『モンゴル帝国期の北東アジア』二〇一六、に再録) 参照。

(2) 今日の北京。フビライは即位当初、この地に燕京行省を設置し実質的に中国支配のための中央政府とした。拙稿「元初の法制に関する一考察——とくに金制との関連について——」(『東洋史研究』第四〇巻第一号、一九八一、所収) 参照。至元元年(一二六四)八月乙卯(十四日)に燕京を中都と改称し、さらに至元九年(一二七二)二月壬辰(三日)に中都を大都と改称した。一般に元朝の首都は大都として知られているが、本稿で扱う話題の場合に時の首都名を厳密に表記してはかえって煩瑣なので、通称また雅称として通用する燕京の称を用いることとした。

また大蒙古国から国号を大元と定めたのが至元八年十一月乙亥(十五日)であったことも付言しておく。本稿の標題に「元初」としたが、厳密に言えば元朝成立以前の事に属する。

(3) 『元寇の新研究』一九三一。

(4) 『高麗史』巻二六、元宗世家、元宗八年正月条、『元高麗紀事』至元四年二月十九日条、『元史』二〇八、高麗伝(至元四年正月)。

(5) 『高麗史』 卷一三〇、趙彝伝（叛逆）参照。

(6) 『元高麗紀事』 至元四年六月十日条にいう（『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗八年八月丙辰朔条により補訂）。

詔曰、「向聞卿之東鄰有日本国、故命使而往招懷、特委卿遣介郷道。不意卿以辞為解、遂令徒還、意者日本既通「好」、必尽知（而）「爾」国虚実、「故托以多辞」。高麗之人在茲者不少、何見之遲。且天命難諶、人道貴誠、与其用智数而苟延、何若推至誠、以保終始。惟卿前後食言多矣、不待縷数而自知焉。今日之事、一以委卿、凡我朝所行、卿之所信服者、当俾官詣彼宣布、以必得要領為期。況卿嘗有言、聖恩天大、誓欲報效、此非報效而何。今遣兵部侍郎黑的・礼部侍郎殷弘持詔往。卿其体朕倚注之意、勿復遲疑。

(7) 『元史』 卷二〇八、高麗伝にいう。

（至元四年）……九月、禎、其の起居舍人潘阜・書状官李挺を遣し国信使に充て、書を持して日本に詣らしむ。

『元高麗紀事』によればこの記事を「九月十一日」とし、また「日本国」とする。

(8) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗八年十一月甲午（十一日）条にいう。

遣弟安慶公湑如蒙古賀正、因告更遣潘阜使於日本。

(9) 『元史』 卷六、世祖紀至元五年正月辛丑（十九日）条にいう。

高麗国王王禎遣其弟湑来朝。詔以禎飾辞見欺、面数其事於湑切責之。復遣北京路総管于也孫脱・礼部郎中孟甲持詔往諭、令具表遣海陽公金俊・侍郎李藏用、与去使同来以聞。

この記事の前半部分によって、『元史』高麗伝の記事を「五年正月、禎遣其弟湑入朝。帝以禎「飾辞」見欺（於湑）、面数其事「於湑」切責之。」と校訂できる。

(10) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗九年二月壬寅条にいう。

壬寅、安慶公涓還自蒙古、賜王西錦一匹・曆日一道。初帝以趙彝之譖、怒不解、親勅涓曰、「前日爾國所奏、朕今說之、爾其詳聽。爾等聞我蒙古中有叛者、輒來誑誘、人誰不知。爾國誠降、則當出軍助戰、輸糧、請達魯花赤点数民戶、爾胡不然。爾國曾於先帝時、遣王綽為質、朕所知也。先帝勅爾王親朝、爾王不能親朝、以我有兄弟之乱也。爾王到京兆府還婦、朕之所護爾王所知。人而不知有德、可謂人乎。爾王奏云、我国地窄、今西京入排屯田軍民、尽令還婦、則當召集殘民、力農三年、然後復都旧京。今屯田軍馬尽還、果還旧京乎。朕使至爾國、則爾使人圍守、真降之意、当如是耶。爾國來聘、朕亦使人守汝使乎。和尚奏云、『爾等賣來國驢紵布、減於旧額、又甚麤惡何也。』爾國素称知礼義、今乃若爾可乎。相戰人所不好、爾欲好戰、当約其地也。爾与日本交通、爾國人來居此者、無不知之。爾於前日何言未嘗交通、以欺朕乎。爾等所奏、皆是妄說、不必答也。」

(11) 『元高麗紀事』至元五年正月二十八日条にいう。なお『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗九年三月壬申条により補訂する。

(至元) 五年正月二十八日、詔諭王(植)「植」曰、「朕惟天道難謀、人道貴誠、而卿之事朕、率以飾辭見欺、朕若受其欺而不言、是朕亦不以誠遇卿也。故与卿弟涓面数其事、無有所隱。向卿自請撤兵三年、当去水就陸、撤兵之請、(久)「既」已從之、就陸之期、今幾年矣。以前言無徵、是用爲問。卿意必曰、舍險即夷、則慮致不虞、或未取信、聽其所止。惟我太祖成吉思皇帝制度、凡内属之国、納質・助軍・輸糧・設駅、供数戶籍・置達魯花赤、已嘗明諭之矣。繼有來章、称俟民生稍集、然後惟命「是從」、稽延至今、終不以成言見報。聞汝国之政、例在左右、得非為所梗蔽、使卿不聞歟。抑卿實聞之、而未之思歟。是豈愛而身立而国者也。且納質之事、自我太(祖)「宗」皇帝、王綽等已入質、代老補亡、固自有例、其駅伝亦粗立、自余率未奉行。(令)「今」我朝方問罪於宋、其所助士卒・舟艦、自量能辦多少。〔所〕輸糧餉則就為儲積、及達魯花赤・戸版之事、卿意(為)「謂」何。今特遣北〔京〕路総管兼大定府尹于也孫脱・礼

部郎中孟甲持〔諭〕〔詔〕以往、当尽情美、令海陽公金俊・侍郎李藏用贊表章、与去使同来、具悉以聞。」

(12) 『元高麗紀事』には「三月二十二日、于也孫脱・孟甲等至高麗。」とある。

(13) 『尚書』商書、咸有二德にいう。

曰嗚呼、天難謀、命靡常。(まじ)(曰く、嗚呼、天は謀とし難く、命は常なし。)

注にいう。

以其無常故難信。(其の常なきを以て故に信じ難し。)

(14) 元宗王禎宛の詔文はすでに池内宏氏が全文を引用している。注(9)に引用した『元史』世祖紀至元五年正月辛丑(十九日)条の後半がそれに該当する。またつぎに引用する同書卷二〇八、高麗伝にも該当する。

(至元五年正月)、……特遣北京〔路〕總管兼大(興)〔定〕府尹于也孫脱・礼部郎中孟甲持詔諭禎、其略曰、「向請撤兵、則已撤之矣。三年當去水就陸、而前言無徵也。又太祖法制、凡内属之國、納質・助軍・輸糧・設駅、編戶籍・置長官、已嘗明諭之、而稽延至今、終無成言。在太(祖)〔宗〕時、王綽等已入質、駅伝亦粗立、余率未奉行。今將問罪於宋、其所助士卒舟艦幾何。輸糧則就為儲積、至若設官及戸版事、其意謂何。故以問之。」

上記の『元史』本紀及び高麗伝の後半の記事に相当する元宗王禎宛の詔文は『元高麗紀事』至元五年正月二十八日条にあり、すでに池内宏氏が全文を引用している。

(15) 『元高麗紀事』にいう(『元史』高麗伝には日付を欠く)。

四月五日、(植)〔禎〕遣門下侍郎李藏用奉表、与于也孫脱等入朝。

(16) 『韓國文集叢刊』(一九九〇)第二輯、『韓國文集中的蒙元史料』(二〇〇四)所収。

(17) 『元高麗紀事』にいう。

（至元五年）五月二十九日、有旨、諭李藏用、若曰、「我太祖成吉思皇帝、（降）諸國之制度、以出軍助戰事、降詔於爾國、爾國不以軍數分明具表、乃以模糊之言來奏。是以王綽奏云、『爾國王所嘗有四萬軍（人）、又雜色可僉一萬軍、共有五萬軍。』故朕（作）「昨」日就勅爾等云、『王所不可無軍、以一萬留衛、以四萬助戰。』爾等奏云、『王所無（爾等）「幾」許軍、綽之言非實、若未信誠、遣使與綽偕往、一一點數、若實有四萬軍、則罪在我輩、惟聖裁。若無四萬軍、則其妄說之人、亦惟聖裁。』若爾等初以分朗之言來奏、則朕何言。爾等以模糊之言來奏、故朕有此言。此乃綽之言乎。又勅云、今此敕昔往論於爾王、速以多少可出征軍數回奏。疑爾等既（往）「為」姑息之計、又復稽延、欲聞爾等端的之言、將遣人督之。若又不以端的之言奏來、則將有損害於爾國。又勅令出軍、爾等必疑將出何地、是乃或欲南宋、或欲日本爾。若徵爾馬牛、則當辭難、爾等常用舟楫、何難之有。君臣一家、爾國有事、朕不救乎。若朝廷將出軍於何地、爾等亦出師助戰、是常理也。今此軍事、將詔諭爾主、其舟艦之事、則爾等備言之、當造舟一千艘、其一千艘能涉大海、可載三千四千石、新而堅好者、若苟備名數、而有旧裂、或小有朽者、則朕亦知之。」藏用奏云、「舟艦之事、今已奉命、即便（廉）「應」副、但促之、則雖大有舟材、人（□）「民」殘少、恐不（即）「及」期。」上又云、「朕又於爾等有言、三皇·五帝·堯·舜·漢·唐之道、朕何必言、爾等說書皆知之。朕取近事言之、爾等亦當知之。往者河西王於成吉思皇帝之世、納女請和、乃曰、『皇帝若征女真、我為右手而助之、若征回回、我為左手而助之。』後成吉思皇帝回兵、討河西而滅之。」藏用奏云、「往者臣國有四萬軍、三十（□）「余」年、死於兵役殆尽、今只有牌子頭·五十戶·百戶·千戶之類、雖有其職、但虛名而無軍卒。」上曰、「死者有之、生者亦有之。爾乃年老誠「實？」之人、為此無端之言耶。」藏用奏云、「果如聖勅、蒙賴聖德、自停兵以來、有生長者、但僅十歲也。」上又曰、「自爾國來者、言海中之事、宋則如得便風、可兩三日而至、日本則朝發而暮至、言是者、乃高麗人与南人也。舟中載米、海中捕魚而食之、則豈不可行乎。」綽復欲言軍事。藏用云、「至尊之前、何必爭說如此。遣使可驗。」上謂綽曰、「言已畢矣。」又勅

藏用云、「歸可以此言論爾主。」

(18) 『元史』卷二〇八、高麗伝にいう。

(太宗) 十三年秋、瞰以族子綽為己子入質。

『高麗史』卷二三、高宗世家、高宗二十八年(一二四一)四月条にいう。

以族子永寧公綽稱為子、率衣冠子弟十人入蒙古、為禿魯花、遣樞密院使崔璘・將軍金宝鼎・左司諫金謙伴行。禿魯花、華言質子也。

『元史』卷一六六、王綽伝、及び『高麗史節要』卷一七、高宗四十一年七月条参照。

(19) 『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗九年六月乙巳条にいう。

蒙古遣吾都止偕藏用來、課戰艦之數与軍額。

(20) 『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗九年秋七月丁卯条にいう。

起居舍人潘阜還自日本。遣閣門使孫世貞・郎將吳惟碩等如蒙古、賀節日。又遣潘阜偕行、上書曰、「向詔臣以宣諭日本、臣即差陪臣潘阜、奉皇帝璽書、并賫臣書及国驢、以前年九月二十三日発船而往、至今年七月十八日回来、云自到彼境、便不納王都、留置西偏大宰府者凡五月、館待甚薄、授以詔旨、而無報章。又贈国驢、多方告諭、竟不聽、逼而送之、以故不得要領而還、未副聖慮、惶懼笑深、輒茲差充陪臣潘阜等以奏。」

(21) 『元史』卷二〇八、高麗伝にいう。

(至元五年) 七月、詔都統領脱朶兒・武德將軍統領王国昌・武略將軍副統領劉傑等使其国、与其來朝者大將軍崔東秀偕行。八月、至其国、禮出昇天府迎之、蓋諭以閔軍造船也。

『元高麗紀事』にいう。

(至元五年) 七月二十日、詔都統領脫朶兒・武德將軍統領王国昌・武略將軍副統領劉傑等使高麗、与其來朝者大將軍崔東秀偕行、八月至其国。(植)「植」出昇天府迎之。蓋諭以閱軍造艦也。詔曰、「卿遣東秀來奏、備兵一万、造船一千隻事。今特遣明威將軍都統領脫朶兒・武德將軍統領王国昌・武略將軍副統領劉傑詣彼、整閱軍數、点視戰艦、其所造船隻、聽其指画。如朶羅已与造船之役、不必重煩。如其不与、即令別造百艘、其軍兵・船隻、整点足備、或往南宋、或「往」日本、逆命征討、臨時制宜、仍仰差去官、先行相視黑山日本道路、卿亦差官護送導達。」

なお同文が『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗九年十月庚寅(十三日)条にみえる。

(22) 王文楚「両宋和高麗海上航路初探」(『文史』第十二輯、一九八二)、陳高華「元朝与高麗的海上交通」(『震檀學報』第七一・七二合号、一九九一、のちに『陳高華文集』二〇〇五、所収) 参照。

(23) 『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗九年十二月丙申(二十日)条にいう。

脱朶兒還、王餞于郊、遣大將軍張鑑伴行。

(24) 『高麗史』卷一三〇、金俊(反逆)伝にいう。

(元宗) 九年、蒙古帝遣使徵兵、勅俊父子及其弟冲、皆赴京師。冲即承俊也。俊聽將軍車松佑言、謀欲殺使深入海中、再白王、王不聽。俊謂松佑曰、「上固拒奈何。」松佑等曰、「龍孫不但今上、諸王固多、況太祖亦以將軍拳事、何有疑慮。」俊深然之、遂決謀欲殺使、令都兵馬録事嚴守安告冲、守安詣其第、極言不可。冲信之、遂沮其謀。然俊益拒蒙古命、王甚快快。俊恐蒙古責不入朝、大会五教沙門於其第、供仏祈福。

(25) 『高麗史節要』卷一八、元宗九年十二月条にいう。

金俊殺国子学諭洪惟叙、惟叙嘗以書状官伴蒙古使吾都止入朝、与金裕說俊密事、百川素為惟叙所侮、聞其言以語俊、故及。

ひとつの推測の案を考えればつぎのようである。洪惟叙が書状官として吾都止と共に蒙古に入朝した際に、黒的・殷弘が申百川・于琬・金裕と高麗に向けて出発しようとしていた。洪惟叙はモンゴルの使者の安全を懸念して金俊の不穏な動きを警戒するよう金裕に告げた。金裕は同行する申百川と情報を共有しようとした。ところが申百川はかねて洪惟叙と関係が好くなかったから情報をそのまま金俊に話した。怒った金俊が洪惟叙を殺害した。

(26) 『止浦集』 卷二、「誅金俊告奏表」にいう。

今有細故、仰告因由者、誠切終始於供職、將輸万世之勤、事無大小以告王、蓋在諸侯之誼。伏念、臣邈居海裔、叨襲藩封、但承厚卹於盛辰、粗保予遺之殘俗。竊以陪臣金俊、樹乃私門之支党、畔其公室之指揮、務從便利於一身、專逞侵漁於百姓、常稔包藏之志、似懷逃竄之謀、慮為何変於將來。今乃悉夷而既去、倘爾屬之通漏、往或譖言。惟我皇之諒知、即皆禁沮。

(27) 『元史』 卷六、世祖紀、至元五年九月(己)「乙丑(十七日) 条にいう。

命兵部侍郎黒的・礼部侍郎殷弘、齋国書復使日本、仍詔高麗国遣人導送、期於必達、毋致如前稽阻。

ここの使者派遣の日付については問題がある。九月の朔日は己酉であるから『元史』世祖紀の干支「己丑」は「乙丑」の誤りと推定する。また『元高麗紀事』及び『元史』高麗伝には干支表記を欠く。但し上記の『元史』世祖紀の記事は「立河南屯田。」という短い文に続けて書かれており、上記記事のあとには安南詔諭のことも含め四項の記事が続く。従って本紀の体例から考えて、日本に関する記事がもと干支表記を欠いて「是月」の意味である可能性も否定できない。

(28) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗九年十一月甲子(十七日)にいう。

蒙古遣兵部侍郎黒的・礼部侍郎殷弘・本国人申百川・于琬・金裕等来。

(29) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗九年十一月丁卯条に詔文は引用されているが、ここの文は「今来奏、有潘阜至日本

逼而送還之語、此亦安足取信。」とある。

(30) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗九年十二月庚辰(四日) 条にいう。

知門下省事申思佺・侍郎陳子厚・起居舍人潘阜、偕黑的・殷弘如日本。

『元高麗紀事』・『元史』 高麗伝には高麗の三官人を申思(全)〔佺〕・侍郎陳井・起居舍人潘阜とする。ここは『高麗史』に従う。

(31) また『師守記』 貞治六年五月九日条にいう。

同(文永) 六年四月廿六日、於院有評定。異国間事、去比蒙古国并高麗国者、上下六十余人来着対馬嶋。是去年帶牒状到来之時、無返牒之条、蒙古国成疑貽、為尋問実否也云々。

(32) 『五代帝王物語』に「不慮の喧嘩いできて帰国の間、対馬の二人とられて高麗へ渡る。」とある。

(33) 国書全体の訓読と翻訳は、拙稿「モンゴル国国書の周辺」(『史窓』第六四号、二〇〇七) 参照。また『元史』 高麗伝には、至元七年十二月に日本と通好すべく高麗王に詔諭したフビライの言葉のなかに、さきに差し遣わした使節が「其の疆吏の梗する所と為り」とある。さらに『元史』 日本伝に、至元六〔七〕年十二月に趙良弼が日本に齎した国書中の一節「疆場の吏の為に抑せられて通ぜず」に同じ趣旨の文言がある。

張東翼氏は「二月二十四日、対馬島側の拒否によって上陸ができなくなったため、対馬島人の塔二郎・彌二郎ら二人を連行して帰還したという」と言い、注で「対馬島の官吏〔将吏〕が船舶を動員して使臣団を危害したという」とされる。張東翼「一二六九年「大蒙古国」中書省の牒と日本側の対応」(注(1)) 参照。

(34) この記事には続けて土地の伝承として後代の佐須郷の海賊の首領弥藤治や沿海の諸浦に点在する蒙古塚のことが見える。この記事が扱った藤定房『対州編年略』 卷二にいう。

同（弘安）七年甲申九月、蒙古世祖王使黒的・弘到対馬嶋、即来志多留、国兵拒之相戦、蒙古賊捕藤次郎・弥次郎二人還云々。州俗伝云、古有対州海賊長号弥藤次者、……

国兵とは古代の制に擬していえば対馬国司配下の兵の意であろう。なお『津島紀事』の紀年の誤りは『対州編年略』の誤りを踏襲してしまったものであった。

（35）筆者のそうした推定は、拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」（『東方学報』第九〇冊、二〇一五、所収）、『経世大典』にみる元朝の対日本外交論」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』史学編第一六号、二〇一七、所収）でも言及した。

（36）このことは筆者が伊奈・志多留を訪れて聞いた土地の人々の談話、志多留出身で対馬の歴史を長く研究してこられた、故永留久恵氏から頂戴した私信、及び氏が編纂執筆に関わった対馬の地方志などによっている。モンゴル使者の伊奈来航や塔二郎・弥二郎への言及を管見の限り年代順に示せば以下のようである。①『新対馬島誌』（一九六四）中世、重要年表（その二）、②『豊玉町誌』（一九九二）対馬の歴史、第一編第三章第三節外寇と倭寇、③『厳原町誌』（一九九七）第三編第二章中世、④『上県町誌』（二〇〇四）第二編第三章中世。①では文永六年条に「志多留の住民藤次郎彌次郎を掠して去る」とある。②には「文永三年、黒的・殷弘ら再度対馬の伊奈浦に來り、塔二郎と弥二郎という二人の島民を拉致して帰った。……おそらく伊奈の役人（院司）が、国書を受理しようとしないので、日本に渡った証人にと、二人を連行しようとしたものと思われる。……塔二郎と弥二郎は高麗から元の都まで送られたことが『東国通鑑』に見え、この時王宮へ召し入れられて歓待されたともいう（『五代帝王物語』、井上靖の小説『塔二と弥三』）」とある。③には②の叙述に加えて「伊奈浦は外国通交の要路で、元使らはこの地の役人（伊奈院司）に国書の伝達を頼んだが、これを拒んで受けないので、日本に渡った証人として島民二人を連行し、後日改めて送還することにより、国書の取次ぎをはた

したのであろう」とある。④には「塔二郎と弥二郎は、高麗を経て蒙古の大都（北京）まで連れて行かれ、王宮にも召し出され、歓待されたようで、彼らは捕虜ではなく、外交の証人として扱われた」との叙述がある。

また宮本常一『私の日本地図15、壱岐・対馬紀行』（一九七六）にいう。

ここには在庁とよばれる家がある。姓は阿比留、宗氏が地頭代として対馬に入るまで、対馬国府の在庁官人であった。宗氏が入国したとき官人としての地位を去り、主として神社の祭祀にあたることになった。伊奈の阿比留氏は阿比留姓の総本家といわれるが、古い文書はあまりなく、写したものが少しある。

(37) 『元高麗紀事』に「（至元六年）三月十六日、（植）〔禰〕復遣申思金〔詮〕奉表、從黑的來朝。」とある。三月十六日は使者が日本から高麗の江都に帰還した日であり、『元高麗紀事』の記事は高麗からモンゴルの燕京に到着したとしか読めない。この記事は『元史』高麗伝に日付を抜き「三月」として踏襲されている。どうやら『元高麗紀事』には誤りがあるようで、「三月十六日」として『高麗史』の三月辛酉（十六日）の記事内容が記されていたか、或いは「三月十六日」は「五月十六日」（或は単に「五月」）の誤りかのどちらかであろう。敢えて後者を採用するが、但しこの案は、「三月十六日」の記事のあとに四月の記事が存在するところに少々難点がある。

(38) その試算について筆者の最初の試みが「蒙古・高麗・日本外交文書簡表（一二六六―一二七九）」の作成であった。拙稿「モンゴル国国書の周辺」（『史窓』第六四号、二〇〇七）参照。

(39) 注（28）参照。また『高麗史』卷一三〇、于琬伝（叛逆）参照。

(40) 『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗八年（一二六七）八月丁丑条。

(41) 『春秋公羊伝』隠公元年にいう。

王者無外、言奔則有外之辞也。（注）王者以天下為家、無絶義。

王者は外なし。奔らば則ち外あるの辞を言うなり。〔注〕王者は天下を以て家と為し、絶つの義なし。

- (42) 『翻訳名義大集』に梵語 Deva-sabha に ついて「〔藏〕 Lhahī mdun-ma ham lhahī ḥdun-sa、〔漢〕天堂、或靈霄殿、〔和〕諸天神の会堂」とある。北畠親房『真言内証義』に「天堂も地獄も心の作所なり」とある。

- (43) 張東翼氏は「一二六九年「大蒙古国」中書省の牒と日本側の対応」(注(1))において中書省牒を解説してつぎのようについて。

モンゴルの使臣団の黒的・殷弘が対馬島に到着したとき、日本側が武力で阻止したことに寛容な理解を示し、その過程で捕まった日本人二人を送還するとの事実を通告した。

- (44) 關鐸「元大都宮苑図考」(『营造学社彙刊』二、一九三〇) 所載「元京城図」「元万寿山図」参照。

- (45) 『元史』卷六、世祖紀について。

・(至元二年十二月) 己丑、瀆山大玉海成、勅置広寒殿。

・(至元三年) 夏四月丁卯、五山珍御榻成、置瓊華島広寒殿。

・(至元四年) 九月壬辰、作玉殿于広寒殿中。

元初の瓊華島や諸宮殿の建造については渡辺健哉『元大都形成史の研究―首都北京の原型』(二〇一七) 参照。

- (46) 『元史』卷二〇八、日本伝について。

(至元) 六年六月、命高麗金有成送還執者、俾中書省牒其国、亦不報。

- (47) 『高麗史』卷一〇六、金有成伝について。

(金) 有成、年十五、中第、調德原府書記、遷同文院録事。元宗朝、元世祖遣秘書監趙良弼、宣撫日本、令我国道達、有成選充書狀、偕良弼往、諭以順逆禍福。日本承命、遣使朝元。

また『東国輿地勝覧』巻四九、徳源都護府、名宦、高麗に、金有成につき「為掌書記」とある。

(48) 拙稿「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」(注(35)) 参照。

(49) 『高麗史』巻二六、元宗世家、元宗十年四月乙未条にいう。

世子諱入朝于蒙古。参政蔡楨・承宣林惟幹・大將軍鄭子璵・郎將印公綬・内官郎將金子貞・牽龍行首羅裕・書狀官学諭金応文等従行。

(50) 『元史』巻六、世祖紀にいう。

(至元六年六月) 丙申、高麗国王王禴遣其世子王(慤)「諱」来朝、賜禴玉帶一、(慤)「諱」金五十両、従官銀幣有差。

(51) 池内宏「高麗元宗朝の廃立事件と蒙古の高麗西北面占領」(『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』一九二五)、同『元寇の新研究』(一九三二) 参照。

(52) 『高麗史節要』巻一八にいう。

(元宗十年) 六月、林衍分遣夜別抄、収捕金鏡・崔璵及其弟璵斬之。御史大夫張季烈恬淡有礼、為王所親信、常出入臥内、大將軍奇蘊為王庶妹婿、参典機密、又籍俊家財、以其珍宝賄鏡・璵。衍皆惡之、流于島。鏡・璵既与衍誅金俊、勢傾朝野、衍恐将害己、先図挙事。壬辰、林衍集三別抄・六番都房于毡庭、与宰枢議曰、「我為王室除權臣、王乃与金鏡等謀欲殺我、不可坐而受戮、我欲行大事、如之何。」宰枢莫敢对。衍歴問之、侍中李蔵用自度不能止、且恐有不測之變、乃以遜位為言。参知政事俞千遇曰、「此大事也、請公反复思之。況今世子在上国、待其還亦未晚也。」衍未決而罷。翌日夜、衍執前將軍權守鈞・大卿李叙・將軍金信祐、皆托以他罪斬之、以威衆心。乙未、衍擢甲率三別抄・六番都房、会百僚奉安慶公曄即位。忽風雨暴作、拔木飛瓦。賀畢、衍率然下階拜蔵用、蓋喜遜位之策也。時王在辰崑宮、衍使左副承宣李昌慶逼出之、左右皆散。王冒雨步出、昌慶進所乘馬、又使其従者五人分侍王与妃、還

于別宮。初衍謀廢立也、司空李応烈曰、「龍孫非一、何必今王。」至是応烈呼嘯踴躍、喜形於色。応烈、衍子惟茂之婦翁也。

(53) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗十年七月丁卯（二十四日）条にいう。

世子自燕京還至婆娑府。靜州官奴丁伍孚潛渡江、告林衍廢立。世子聞之疑慮、伍孚曰、「告奏使郭汝弼在靈州、請使人見之。」世子使同來蒙古使者七人執汝弼于靈州、又執防護訳語鄭庇、問知其実痛哭、還入蒙古。

丁伍孚は『高麗史』 卷一三〇、林衍伝には丁五孚に作る。また『東国輿地勝覧』 卷五三、義州牧、山川に婆娑鋪が見える。同じく人物・高麗に丁五甫の名が見えつぎのようにある。

林衍擅廢立、聞世子東歸、遣兵待于鴨綠、將脅之。五甫夜渡江告變、世子還朝以聞、帝詔王復位入朝、衍憂懼發疽死。

(54) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗十年八月乙亥（二日）条にいう。

世子遣大將軍鄭子璵以書論國人曰、須復父王位、不爾則立順安公悰。

(55) 『元史』 卷六、世祖紀にいう。

（至元六年八月丙申）、高麗国世子（愷）「諫」奏、其国臣僚擅廢国王王禎、立其弟安慶公涓、詔遣幹朶思不花・李諤等往其国詳問、条具以聞。

但しこの記事は八月丙申（二十三日）に沙州・肅州の鈔法の記事、及び諸路の勸農の記事の後にあり、同月末尾にあるから、日付を欠いて「是月」の意味であると考えたい。とすれば、この記事は世子の哀訴の奏よりも幹朶思不花らの高麗への急派に重点があると見るべきだろう。

(56) 『元高麗紀事』にいう。

(至元六年) 八月、(植)「植」世子(慤)「慤」来、言臣下擅廢置其君、遣幹朶思不花詳問之。詔曰、「論高麗国文武臣僚。拋世子(慤)「慤」来奏、本国臣下擅自將国王廢去、其弟安慶公曄立為国王。朕初聞之、以為誠偽無徵、未可深信。国王(植)「植」嗣位以来、未聞有過、苟有過失、諫而不悛、当控告朝廷、以聽我区处、不有朝廷臣下擅自廢置、互古以来、寧有是理。今遣使臣幹朶思不花・李諤等、前去詳問。若伝聞之誤、王身無災、於汝何責、如其果然、敢有将国王与世子并其(余)「族」屬、一有戕害者、朕必無赦。汝等其明諭朕心、審(視)「思」臣節、当条具以聞。」二十五日、幹朶思不花等至高麗。

幹朶思不花(幹朶兒不花)らが世祖の詔を伝えたことは『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗十年八月戊戌(二十五日)条、及び辛丑(二十八日)条にいう。

戊戌、蒙古遣幹朶兒不花・李諤等、与世子書狀官金応文偕来、詔論文武臣僚曰、……。辛丑、王宴幹朶兒不花。

『高麗史』元宗世家のこのあたりの記事を見ると、権王の曄については「王」といわず「曄」とあるが、辛丑の記事は国王としての公式行事の故に「王」と書いたと考えておく。

(57) 『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗十年九月庚戌(七日)条にいう。

林衍遣枢密院副使金方慶・大將軍崔東秀偕蒙使如蒙古。陪臣表略曰、「前王遘疾、大漸惟幾、庶將護分以延期、因切辞榮而遜位、況將弟及、先君有言、抑此藩称一日難曠、而国王曄苟忤父王之命、恐違臣子之常、肆不獲已而權攝保釐、輒曾具由而趣騰申奏。其王与世子族属之佳否、伏望採王人之目觀并賤介之口陳、原実閔情、軫慈加恤。」

『元高麗紀事』にいう。

(至元六年) 九月七日、高麗国枢密院副使金方慶奉表、從幹朶思不花等入朝。

『元史』卷六、世祖紀にいう。

(九月)、……車駕至自上都。幹朶思不花・李諤以高麗刑部尚書金方慶至、奉權国王渥表、訴国王禎遺疾、令弟渥權国事。

(58) 『元史』卷六、世祖紀にいう。

(至元六年九月) 己未(十六日)、授高麗世子王(愷)「諡」特進上柱国・東安公。……戊辰(二十五日)、勅高麗世子(愷)「諡」率兵三千赴其国難、(愷)「諡」辞東安公、乃授特進上柱国。辛未(二十八日)、勅管軍万户宋仲義征高麗。

『元高麗紀事』にいう。

(至元六年九月) 二十二日、枢密院・御史台奏、「世子(愷)「諡」称、「若去出征、能辦三千軍糧草、更比及就得此糧、此間先准備五箇月糧、於事為宜。」又說『如令先一千軍入境、不可不令我等同往、若止軍行、則恐其人驚駭、逃往他境、若我等同往到彼、先令使臣(將)曉示文書、令其勿懼、如此撫諭而入、於事為宜。』……」奉聖旨。「卿等与中書再議、既世子欲与軍一处入討、何妨令早入其地。」又脱脱兒求馬合答奏、「臣等与省官商議、脱脱兒并千戸二人亦自聰明、一行二十人、且令在彼屯駐、馬匹合与。」奉聖旨。「卿等如此議定、可斟酌与之。」二十五日、授高麗世子(愷)「諡」特進上柱国。詔高麗国世子王(愷)「諡」、卿弼承乃父、屏翰我家、再修朝覲之儀、益見忠勤之志、念汝邦之未輯、庶東土之有依、優錫寵光、用章藩嫡、授特進上柱国、尚加恭恪、用副眷懷。是月、抄不花奉旨、於王綽・洪茶(邱)「丘」所管戸内、僉起軍士、差断事官別同瓦、馳馭於綽・茶(邱)「丘」所管至元六年実科差戸内、僉起立百戸牌子、整点足備、限十月終、東京取齊、交付枢密院收管、実得三千三百人。

(59) 『元史』卷六、世祖紀至元六年十月丁亥(十五日)条にいう。

詔遣兵部侍郎黑的・淄萊路總管府判官徐世雄、召高麗国王王禎・王弟渥及權臣林衍俱赴闕。命国王頭輦哥以兵匡其境、趙壁行中書省于東京。仍降詔諭高麗国軍民。

『元高麗紀事』にいう。

是月（十月）、遣国王頭輦哥率兵撫定高麗。詔諭高麗国官吏軍民曰、「以爾国權臣擅行廢立、特遣国王頭輦哥等行中書省事、率兵東下、撫定汝国、惟首是問、自余吏民、一無所及、惟爾有衆、咸当安堵如故。詔諭之後、其或妄生疑懼、乱行叛竄、必加俘略。若爾等悉遵約束、安守旧業、已勅將帥、嚴申兵律、不致侵擾。」及召（植）〔植〕并安慶公涓・林衍等入朝。詔曰、「諭高麗王王（植）〔植〕及僚屬軍民、頃以王（植）〔植〕称疾、擅立安慶公涓、權総国事、遣使為問、……」

〔60〕『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗十年十月乙亥（三日）条にいう。

西北面兵馬使營記官崔坦・韓慎・三和県人前校尉李延齡・定遠都護郎將桂文庇・延州人玄孝哲等、以誅林衍為名、嘯聚龍岡・咸從・三和人、殺咸從県令崔元、夜入椽局、殺分司御史沈元濬・監倉朴守奕・京別抄等以叛。

『元史』卷六、世祖紀至元六年十一月癸卯（二日）条にいう。『元高麗紀事』、『元史』高麗伝も同じ。

高麗都統領崔坦等、以林衍作乱、挈西京五十余城來附。

〔61〕『元高麗紀事』にいう。

（至元六年十一月）二十三日、（植）〔植〕受詔復位。是日、（植）〔植〕遣借礼部侍郎朴（杰）〔杰〕從黑的等、奉表入朝。

『元史』卷六、世祖紀至元六年十一月庚午（二十九日）条にいう。

高麗国王王禎遣其尚書礼部侍郎朴杰從黑的入朝、表称受詔已復位、尋当入覲。

『高麗史』卷二六、元宗世家、元宗十年十一月戊辰（二十七日）条にいう。

遣奉御朴杰如蒙古上表、略曰、臣嘗緣眇質、忽遭沈痾、擬資服餌之方、將見痊平之効、乃以臣弟涓權摂国事、仍馳賤介、往奏元由。今蒙聖德之日加、更致和倪於時拱、況宣累詔、曲垂訓諭之辭、又降華駢、庸示微呼之寵、茲復勉

居於藩寄、庶當尋覲於闕庭。

(62) 『高麗史』 卷一三〇、林衍伝にいう。

命中書省牒衍曰、「汝之子有来奏、臣僚亦有来奏、朕意未詳、汝於是時、宜即入朝明辨。」衍欲拒命、遣夜別抄于諸道、督民入居諸島。衍憂懣、疽發背而死。

(63) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、元宗十年五月丙午（二日）条にいう。

慶尚道按察使馳報、濟州人漂風至日本還言、「日本具兵船、將寇我。」於是遣三別抄及大角班、巡戍海辺、又令沿海郡界管城積穀、移彰善果所藏国史於珍島。

『慶尚道先生案』によつてこのとき慶尚道按察使に任じられたのが崔沼と判明する。『増補慶尚道先生案』（韓国国学振興院、二〇〇五）の利用につき藤本幸夫氏の援助を得た。氏の厚情に謝意を表する。

(64) 張東翼「一二六九年「大蒙古国」中書省の牒と日本側の対応」（注（1））参照。

(65) 『慶尚道先生案』によれば「庚午、春夏等按察使崔儒」とある。庚午は元宗十一年（至元七年、一二七〇）である。また『高麗史』 卷一〇六、嚴守安伝にいう。

（元宗）十一年、王自元請兵而來、將復古都。衍子惟茂欲拒之、令夜別抄四出、諭人民入保海島山城、別抄九人至金州。守安告按廉崔儒曰、不可聽權臣之言輕動百姓、宜執別抄待變。儒從之囚別抄。未幾、惟茂誅、一方晏然。

(66) 烏雲^{オウウン}高娃^{ガワ}氏は張東翼氏の論点を発展させて、慶尚道按察使の牒文が高麗の新王攄の反蒙古的態度を反映したものと解釈する（『元朝与高麗關係研究』（二〇一二） 5 「元朝征日本及高麗的態度」）。但し筆者は「北朝」の語のみに拠る論旨の展開には警戒的である。

(67) 拙稿「モンゴル国国書の周辺」（注（33））参照。張東翼氏は「すべての事情は、その者から聴取すれば詳しく知れる

でしょう」と訳文を提示された。注(1) 参照。

- (68) 大蒙古国中書省の牒には確かに「漢唐以来、亦嘗通中国。」とのみある。『鎌倉遺文』の「唐漢」は「漢唐」に改めるべきである。

- (69) 大蒙古国中書省の牒にある文言と拙訳(注(33) 参照) はつぎのようである。

若猶負固恃險、謂莫我何、杳無來、則天威赫怒、命將出師、戰舸万艘、徑圧王城、則將有噬臍無及之悔矣。

それでもなおも国の堅固を恃んで、当方を何とも思わず、遠方ゆえ来ることもないと考えるようなら、それこそ天威は怒りが火につき、武將に命じて軍隊を出し、万艘もの戦艦でもって、ただちに王城をおし潰^{つぶ}そう。そうなたたら臍^{はせ}をかんでも及ばないとの後悔をするばかりである。

- (70) 「贈蒙古国中書省牒」(『本朝文集』卷六七) は即ち『鎌倉遺文』卷一四、一〇五七一「日本国太政官牒」、「贈高麗国牒」(『本朝文集』卷六七) は即ち同一〇五八八「大宰府守護所牒」である。なお丸山雍成「日本前近代の交通史研究の素描——陸上交通を中心として——」(『交通史研究』八四、二〇一四、所収) によれば、中世の飛脚が要した日数に関して、鎌倉→京都、普通五〜七日、京都→博多、蒙古襲来時、九日・十一日・十六日などがある。

- (71) 山本光朗「元使趙良弼について」(『史流』四〇号、二〇〇一、所収) 参照。

- (72) 拙稿『経世大典』にみる元朝の対日本外交論(注(35)) 参照。また高銀美「大宰府守護所と外交」(『古文書研究』七三、二〇一二、所収) 参照。

- (73) 寛元三年(一二四五)・四年の動静について『対州編年略』卷二にいう。

同(寛元)三年乙巳、対馬嶋在序阿比留平太郎不従太宰府之御下知、其故此比武藤判官知宗君、蒙九州二島之物大將、且為当嶋等之地頭職之間、遣家臣俵主税・中原狩野介等、有沙汰地頭分故也云々。……

同年十二月、知宗君以其息弥次郎左衛門尉重尚君為大將、副兵士被遣当嶋。……

同四年丙午正月元日、重尚君引卒兵士、来着対馬嶋。同五日、被令討平太郎了。此時從來重尚君者、先齋藤帶刀・

同甚八・立石三河・饗場彦六……

唐坊長秋『十九公実録』護国公実録にいう（護国公は宗盛幹、即ち知宗）。

寛元三年乙巳冬十二月、公遣世子重尚擊対馬島。先是、在庁官人阿比留国時抱有本島、不従宰府之令、……

（寛元）四年丙午春正月朔、世子航海至豆酲、屯金剛院。……鷄知之戰、佐須党士十人、先至納款、戰尤有功、後每大閱、執弓負箠、先驅以従、謂之十張弓衆。每歲元正、賜直会饌於公館云。安利之發也、妻阿比留氏覬知其謀、夜往告国時、投水而死、時人聞而悲之。

『宗氏家譜』卷一、重尚君にいう。

重尚者、知宗長子也。称弥次郎左衛門尉。寛元四年、滅対馬州在庁阿比留平太郎、遂受父知宗之讓襲封。重尚採祖母之氏為宗氏、以惟宗為自家姓如故。重尚多病而無嗣子。弘長元年辛酉、讓封於季弟助國、退居対州内山、又移居豆酲、……

阿比留氏が代官となったことについては『対州編年略』卷二にいう。

同（文永）三年丙寅、蒙古使船来。此比、以阿比留太郎被為代官了。

文永三年の「蒙古使船来」とあるのは、「来」についてみれば文永五年正月に九州に来着した潘阜の第二次遣使を指すはずだが、実際には撰者が『元史』等の史書を檢しながら第一次遣使の企図と混同したものであらう。

文永十一年の小茂田浜の戦については『宗氏家譜』卷一、助国君にいう。

文永十一年甲戌、蒙漢將侵本国、故筑紫海浜有防禦之備。助国率兵来対州、嚴加防備、自領親兵八十余騎居州府、

以待賊船之來寇。同年十月、蒙漢元帥忽敦・洪茶丘率兵士二万五千、高麗元帥金方慶率兵士八千、戰艦共九百余艘、解纜於高麗迎浦、同月十五日、〔注…或曰初五日。〕到佐領郡小茂田浦。助国即率兵發州府、到小茂田。翌日早朝、通事真經男為使、問戰艦到対州之志趣。賊兵不答、直進發矢、下陸者既一千余人、助国乃指麾諸軍、戰于海浜、州兵尋到、助国發矢射賊、殪數十人、宗右馬次郎亦射前隊將殪之。於是賊兵競進下陸、助国先驅勵衆、手擊蒙漢兵、州兵尽力奮擊。斬獲甚衆、到辰時、終大破之。助国亦墜命於沙壤。賊兵敗走、乘船侵壹岐州而返。其死于対州及壹州者、凡一万三千五百余人也。対州將士死于是役者、宗右衛門三郎・宗甲斐六郎・宗右馬次郎・宗弥次郎・宗刑部・宗内藏・宗大和・宗下野・宗藤四郎・宗八郎・在庁左近・口井藤三・口井源三郎〔注…藤三・源三郎、便肥前州御家人、当謫対州者也。〕・齋藤帶刀・齋藤加賀〔注…初称甚八。〕・齋藤才兵衛・齋藤治左エ門・齋藤藤内・俵伊賀・俵内膳・中原善九郎・立石宗古・立石三左エ門・森岡宮内・阿比留伊右エ門・阿比留小六・阿比留日向・長野源六・大浦壹岐等也。有齋藤兵衛三郎資定者、驍勇絶倫、小茂田浜之役、揮劍力戰、斬賊甚多、刀劍忽折、不為少退、直進提賊、以石擊面、殺得九人而後死。対州士民感助国之勇義、建祠於小茂田浜祭焉、号師大明神、以齋藤資定為從祠、号之勲功神。

戦死者のなかに在庁の称や阿比留姓のものがあるのが注目される。

長節子「対馬島宗氏世系の成立」〔『日本歴史』二〇八号、一九六五、所収〕、同「対馬島主の継承と宗氏系譜―朝鮮国議政府への宗貞茂呈書をめぐって―」〔『史学雑誌』第七五編第一号、一九六六、所収〕、永留久恵『古代史の鍵・対馬』一九七五）参照。